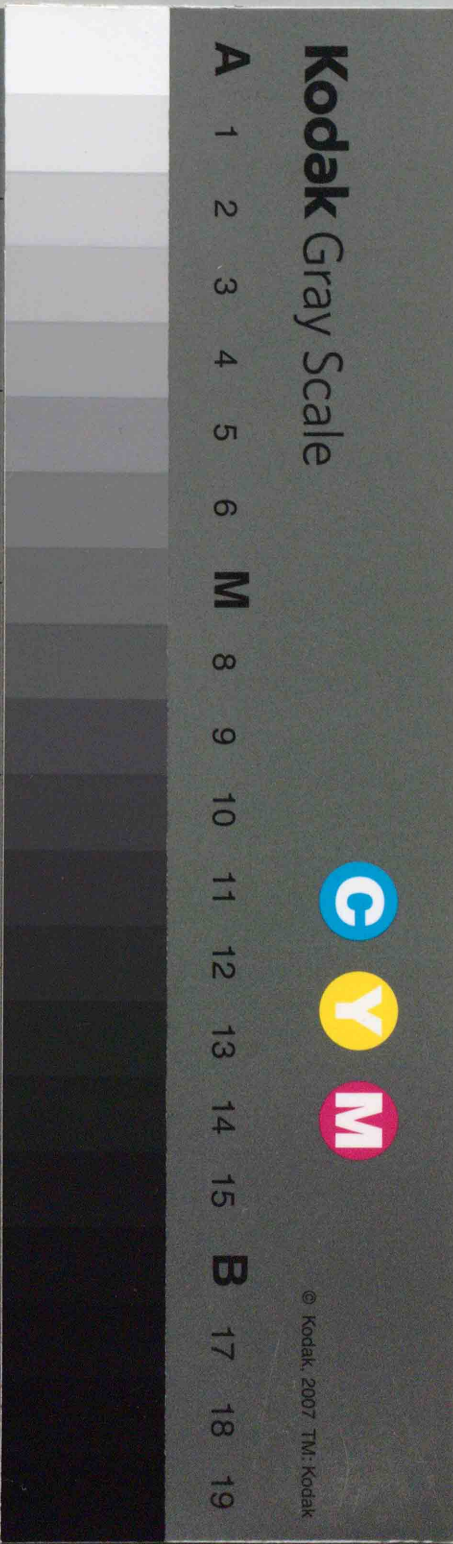
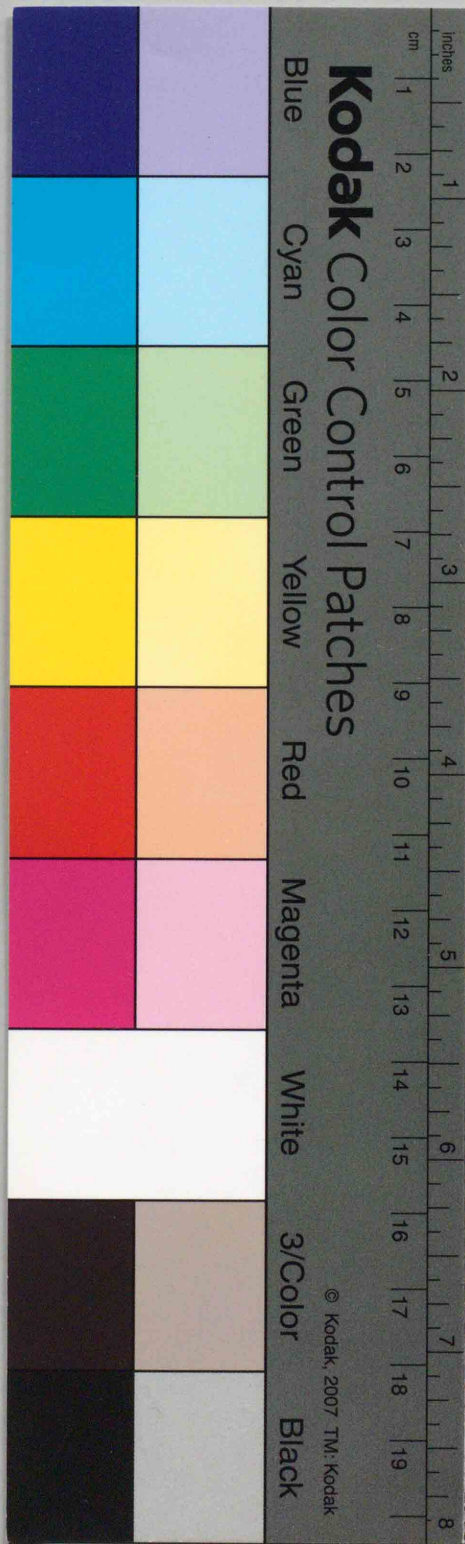


帝國新讀本卷三

3759  
11a7  
資料室

教  
4  
200



41563

教科書文庫

4
810
41-1925
2000 30/560



教科書文庫

4

810

41-1925

2000301560

帝國海軍

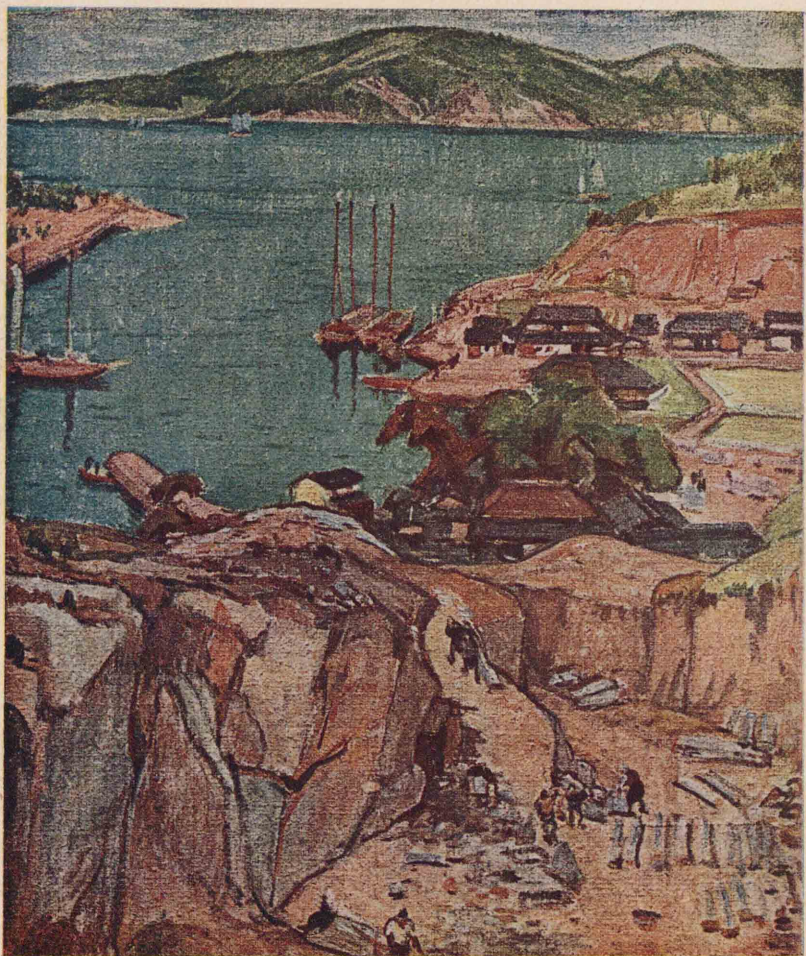
資料室

370.9

H27

日六十月二年四十正大

濟定檢省部文



海 內 戶 瀨

# 帝國新讀本

文學博士芳賀矢一編

東京

合資  
會社

富山房

發兌



帝國新讀本卷三

目次

一	大日本國……………	一
二	神代 その一……………	三
三	神代 その二……………	八
四	勿來關……………	四
五	お遍路さん……………	七
	大佛の柱くゞり(自修文)……………	三
六	千石船……………	七
七	潮の岬……………	三

目次

広島大学図書

2000301560



八	少ピット	.....	五
九	英京に於ける東宮殿下その一	.....	四
一〇	英京に於ける東宮殿下その二	.....	四
	佛國戰跡の御巡覽(自修文)	.....	五
一一	若さ	.....	六
一二	春の水	.....	六
一三	武士道	.....	七
一四	桶狭間の戦その一	.....	七
一五	桶狭間の戦その二	.....	八
一六	きらめく稻妻	.....	八
一七	太閤と曾呂利	.....	九

一八	二挺の鎌	.....	九
	少年の頃(自修文)	.....	一〇
一九	漸進主義	.....	一〇
二〇	海洋の月明	.....	一一
二一	山寺	.....	一一
二二	富士の大観	.....	一二
二三	四季の富士	.....	一二
	飛行機がとぶ(自修文)	.....	一三
二四	夏の日の夢	.....	一三
二五	臺灣の旅その一	.....	一四
二六	臺灣の旅その二	.....	一四

二七	我が南洋	.....	一五三
二八	正覺坊	.....	一六〇
	宿かり(自修文)	.....	一六六
二九	談義僧	.....	一七〇
三〇	立秋	.....	一七五
三一	風と露	.....	一七七
	一 風の音	.....	
	二 露の色	.....	
三二	月の戦場が原	.....	一八一
三三	ひとの親	.....	一九一
三四	人の香氣	.....	一九三
	禮儀作法(自修文)	.....	一九七

目次終



帝國新讀本 卷三

一 大日本國

御祖 <small>みおや</small> の神の	産ませし國に、
皇孫 <small>すみま</small> 降りて	君とし知らず、
寶祚は天地と、	窮あらず、
この國、この君、	世に類なし、
大君、民を	子の如 <small>ごと</small> おほし、
國民、君をば	親とし慕ふ、
さながら一家の	睦はとほに、

とはに

この國、この民、

世に類なし。

鎮の山

大和の國の

鎮の山と、

神さび

富士の嶺み空に

神さび立てり。

貴き皇國の

姿を見せて

高きはこの山、

世に類なし。

日出づる國の

しるしの花と、

櫻は霞に

まがひて咲けり。

けだかく雄々しき

國ぶり見せて、

匂ふはこの花、

世に類なし。

けだかく雄々  
しき  
國ぶり

二 神代

人類に歴史ありてより幾千年、我が國史の神代に始れるは、たま〜以て、我が國の世界の舊邦たるを證明する所以なり。

造化

天地開闢の初、高天原に生まれ出で給へる神は、天御中主神、次に高御産靈神、次に神皇産靈神、この三神は萬物造化の神なり。次に國土未だ成らずして浮脂の如く漂へる中に、葦の芽の萌出づるに似たるものあり。これにより生まれ給へる神は、可美葦芽彦舅神、天常立神、次に浮脂の如き物より生まれ給へる神は、國常立神、豊斟淳神、以上の七神は獨神にして、御身を隠し給へりといへり。次に男女の神相次ぎて生ま

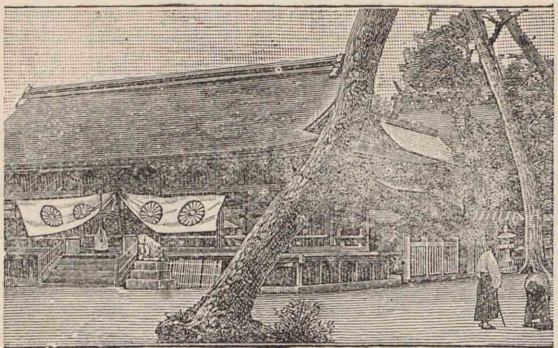
れ給ふこと五代、五代目の男神を伊弉諾神、女神を伊弉册神と申す。

諸の天神この二神に詔して、このうかび漂へる國を固め成せ。と宣ふ。二神乃ち天瓊矛を持ちて、天の浮橋の上に立ち、瓊矛をさし下して探り給ふに、矛の先より滴る潮凝りて島と成れり。これ磯馭島なり。二神ここに於てその島に降り、八尋殿を建てて住み給ひ、それより國土及び神々を生成し給ふ。まつ淡路島、次に四國の島、次に隱岐の島、次に筑紫の島、次に壹岐の島、次に對馬の島、次に佐渡の島、次に大倭豊秋津島即ち本州なり。まつこの八島を生成し給へれば、日本國の古名を大八洲國と稱ふ。その他なほ小さき島々を生成し給

大八洲國

へり。かく國土を生成し終へて後、風の神、海の神、山の神、木の

神、野の神等を次々に生成し給ふ。



伊弉册神諾神社 (淡路多賀)

素戔嗚神には海の國を治めよと教へ給ひぬ。

伊弉册神、最後に火の神を生成し給ひて神去りましぬ。伊

神去る



禊

非諾神はこれを歎きて、女神のいます黄泉國まで到り給ひしが、やがて歸り來て、汚き國に行きたれば、禊して穢を清めんと宣ひて、筑紫の橘の小門の檣原に於て、御身を洗ひ清め給ふ。この時、御衣、御帶、御珠等解棄て給へる物よりして成出で給へる神々を始め、數多の神々自ら成出で給ふ。

又三國土

さらふ

汚き心

たばさむ

さるほどに、素戔嗚神、性勇悍にして、粗暴のふるまひ多かりしかば、父の神の怒に觸れて、遠き國へさすらひ給はんとす。よりて一度姉大神に暇乞せんものと、高天原さして上り給ふに、山川國土悉く震動す。大神驚き給ひて、弟の神汚き心ありて我が國を奪ふならん。と宣ひて、弓矢をたばさみて待ち給ふ。素戔嗚神上り來て、邪心なき由を申し給ひ、二神相盟

あはなち  
みぞうめ  
しきまき

ひて、大神は素戔嗚神の佩び給へる十握劍を取り給ひ、素戔嗚神は大神の持ち給へる御統玉を乞受け給ひて、いづれも天の眞名井の水にふりすゝぎて、嚼碎きて吹き給ふ。その霧の中より多くの神々成出で給へり。御劍の霧の中よりは女神三柱、御珠の霧の中よりは男神五柱なり。この男神の第一を天忍穗耳神と申す。大神喜びて、こは我が物より生まれ出でたれば我が子なり。と宣ふ。

かくて大神の御心は和きたれど、素戔嗚神の荒びたる行はなほやまず、大神の御田に畔放ち、溝埋め、重播などさまさまの悪事を爲して農業を妨げ給ひ、或時は新嘗の御殿に糞まり散らし、又齋機殿に生きたる馬を逆剝にして、投入れ給

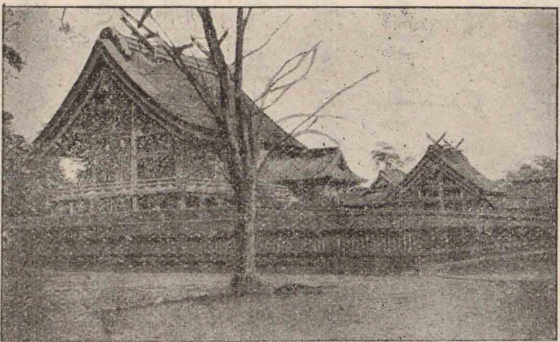
へり。恩愛慈仁の徳に富ませ給へる大神も、つひにその亂行に堪へかね給ひて、天岩戸にこもり給へり。ここに於て八百萬神、神議りに議り給ひて、再び大神を岩屋より出し奉り、素戔嗚神はこの罪によりて、出雲に追はれ給ひぬ。

三 神代 その二

素戔嗚尊は出雲の簸(ひ)の川(か)上(か)に至りて、足摩乳(あしまたち)、手摩乳(てまたち)といふ老夫婦に逢ひ給ひ、その請によりて、八岐の大蛇(やまたせう)を退治し給ふ。さて老夫婦が八人の娘の中、たゞ一人残れる櫛稻田(くしいな)姫を妃として、須賀といふ所に宮造りして住み給ひ、御子、御孫次第に榮えたり。

(一)仁多郡船通山に發し、矢道湖に入る。

その六代目の御孫を大國主神といふ。大己貴神、八千矛神



出雲大社

などいふ別名もあり。稻葉の白兔を助け給ひし神なり。幼き時は種々の困難に逢ひ給ひしが、御行正しく、御徳高かりしかば、心悪しき兄神たちも次第に服し奉りて、よく出雲地方を治め給へり。その後少彦名神(すくなひな)と心をあはせて、なほ國土の經營に努め給ひ、醫藥の道をさへ教へ給へり。

國土經營

豐葦原の瑞穂國

高天原なる天照大神は、豐葦原の瑞穂の國は、我が子孫の君たるべき國なり。」と宣ひて、御子天忍穗耳神を下し給はん

復命  
はた

とす。されども國中未だ神命に従はざる者多かりしかば、ま  
づ天穗日神をして、大國主神にその旨を傳へしめ給ふ。穗日  
神三年まで復命せず、よりに更に天稚彦を遣はし給ひしが、  
これはた八年に至るまで復命せざりき。ここに於て武甕槌  
神を遣はして下らしめ給ふ。大國主神、長子事代主神と謀り  
て、畏し。この國は御子に奉らん。と答ふ。次子の建御名方神は  
服する色なく、信濃國諏訪に逃げのびしが、そこに終に屈  
服せり。

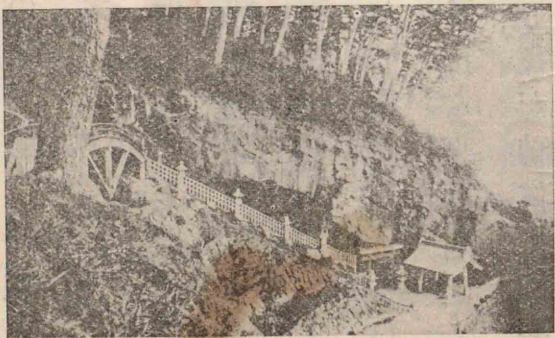
この時天忍穗耳神の御子に、瓊々杵神生まれ給ひしかば、  
父神に代りて下り給ふこととなり、多くの文臣武將を隨へ  
てこの國に降臨し給ふ。この時天照大神は詔して、爾皇孫行

寶祚の榮は  
天壤と窮な  
かるべし

この鏡を見  
ること我を  
見るが如く  
せよ

きて治めよ。寶祚の榮は天壤と窮なかるべし。と宣ひ、又八咫  
鏡と、叢雲劔と、八坂瓊曲玉とを授け給  
ひて、この鏡を見ること、我を見るが如  
くせよ。と仰せ給ひき。これ歷代傳へ給  
へる三種の神器にして、萬世一系の皇  
統は、ここにその基を開けるなり。

瓊々杵神は國神大山祇神の女木花  
開耶姬を娶り給ひて、火闌降神、彥火々  
出見神等を産み給ふ。彥火々出見神は  
海神の宮に行き給ひし神なり。海神の女豊玉姫を娶り給ひ  
て、その皇子に鷓鴣草葺不合神あり。この神の第四の御子は、



(戸鷓向口) 宮神戸鷓

即ち神武天皇なり。天孫降臨より四代まで日向に都し給ひしが、神武天皇御年四十五にして東行の途に上り給ひ、大和地方の賊を平げて、始めて大和の橿原の地に即位の式を擧げ給ふ。これを我が國の紀元第一年とす。

傳唱

明確を失ふ  
信念

歴史眼

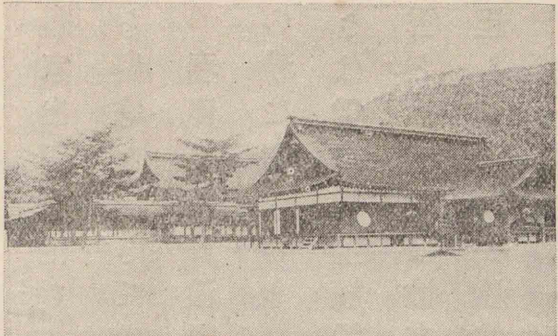
特色  
殘虐暴戾

思ふに、上代には文字なければ、世々傳唱の久しき、史傳の明確を失ふもの多く、天地開闢の説明、神祇崇敬の信念も交れるを以て、今の歴史眼を以て神代の事實を知らんことは難し。但しこれを他人種の開闢史に比して、我が國土が皇祖諸神と同じく、伊弉諾、伊弉册二神の御子たる事は、國土と皇室と相離れざる信念を示すものとして、我が神代史の一特色といふべし。他人種の神話には、往々殘虐暴戾の神多きに、

君臣の分  
上下の誼

國體の淵源

(一)江戸時代の國學者村田春海の門人賀茂真淵の著「文化八年(一八二一年)七月六日」



橿原神社 (大和欽)

我が神々の温和慈仁の徳に富ませ給へるを見て、我が國民性の一端を知るべし。總じて平和の神話にして、君臣の分早くより定まり、上下の誼親子に等しき所以も、これによりて窺ふべく、祖先を尊奉して、萬世動かざる國體の淵源も、これによりて知るを得べきなり。

天地の神やかためし萬世に

たてて動かぬ國の御柱

平 春海

(一)清原氏、出羽の豪族。寛治元年(一一七四)に攻められ、捕へられて殺された。  
(二)清原武衡の甥。寛治元年(一一七四)に殺された。

武衡<sup>(一)</sup>すでに縛に就き、家衡<sup>(二)</sup>誅に伏し、與黨亦斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

四

勿來關

熊田葦城

與黨 悅服

客心 (三)常陸、磐城の國境

模糊 續紛

兵馬倥傯

襟懷

春風長閑に渡りて、一路の芳草、馬蹄輕し。客心悠々、又戰時の秋に似ず。行きく<sup>(三)</sup>て勿來關に差掛る。山上模糊として白きは雲か。地上續紛として翻るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻。關山春深き所、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥傯の間に在りては、月を觀ても樂しからず。鳥を聽くもうれしからじ。今や干戈すでに戢<sup>(四)</sup>りて、襟懷特

逸興

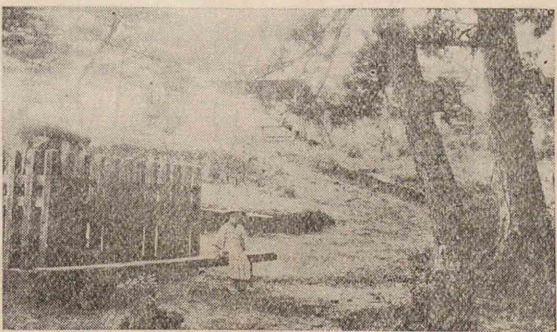
一かへり二かへり 口吟む

長亭短驛 門前市を成す

に安し。將軍駒を樹下に駐<sup>(五)</sup>めて願望すれば、宵も花、甲も花、身はいつしか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。  
吹く風をなこそその關と思へども  
みちもせに散る山ざぐらかな  
一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて一門光を添ふ。來りて賀を述ぶる者、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人、義家に向かひて語る。陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それぞれに見候ひなん。これのみこそ羨ましき心地すれ。と。義家畏

まりつゝ答ふ、心長閑けく候はんには、ゆかしき事も候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。たゞ勿來關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、そのまゝにうち過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せてかくなん仕りぬる。』とて、彼の吹く風の歌をうち誦すれば、實にも秀歌をこそ致しつれ。』とて、感歎特に淺からず。花は櫻木、人は武士、この人この花を詠じて、花と人と千古に香し。



勿來關の址

—日本史蹟—

をこ

秀歌

### 五 お遍路さん

荻原井泉水

りんく〜といふ<sup>ア</sup>牙えた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ——「お遍路さん。」とは何といふ親み深い言葉だらう。——四國八十八箇所<sup>(一)</sup>に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。しかしかに信仰の爲とはいへ、四國を一巡することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵のことではないので、四國の代りにこの小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得ることとされてゐる。『島四國』といふ言葉も出來てゐる。

(一)讚岐國大串崎の北方海中。

(一)小豆島第一の  
都會、岡山の  
松から十八湊、高  
松から十二湊

る。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡山から若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港(一)のしやうに着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をかち上げて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりん／＼といふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

教門

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものは、いつ頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信念を厚くする上からいつても、誠に好いことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る所で愛せられる。又惠まれる。お遍路さん同志も亦お互に遍路であるといふことの爲に信賴する。又扶助する。これが實に好いことだと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さ

眞實の道

んが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは遍路としての誰もが一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參するには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、唯一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することが出来るのだ。南無大師遍照金剛」と讚仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しいことだ。争鬪と欺瞞の満ちた社會の中にあつて、信賴と扶助に心を合はせて行くくらゐ美しいことが他にあらうか。この島の春を賑すお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ

信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。

そしてこれは獨りお遍路さんの上のことだけではなない。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名前を書いた札を撒散まきしながら、自分自分の道を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信賴と扶助が行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちはまづ彼等の信と愛を以て人生を歩きたいものである。

— 山水巡禮 —

暗示



大佛の柱くゞり (自修文)

十返舎一九

(一)江戸時代の滑稽小説家。本名は重田貞一。著「膝栗毛」の著者として最も名高い。天保二年(一八五一)歿。年六十七。

(二)京都市下京區大佛正面(二天正十四年(一八四六年)豊臣秀吉の建立。歴地震雷火等の禍に罹り、今は舊觀を存してならぬ。

(三)大日如來。

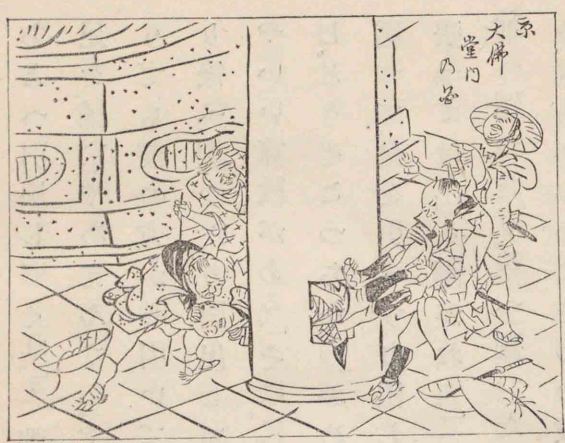
法施 賽錢を上げること。

がうせい 豪勢と書く。壯大。

田舎道者 田舎から出て神社佛閣の巡拜に諸國を遍歴する者。巡廻路者。

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧舍那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎兵衛、北八ここに法施し奉りて、彌さんと話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやあねえか。あのかうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるさうだ。あの鼻の穴から人が傘をさして出られるとよ。おやお背中窓があいてゐらあ。北、あれは大方汐を吹く所だらう。彌、鯨ぢやあるめえし。北、おや、あれみんなが柱の穴をくゞつてゐるわ。彌、ほんに、こいつは奇妙々々。この御堂の柱の許には、ちやうど人のくゞるだけの切抜きし穴あり。田舎道者ども戯にこれをくゞりぬける。北、八同じくくゞり、北、こりや面白い。しかしおいらはくゞれるが、彌次さんは太つてゐるからぬけられめえ。彌、おれだどつてなにこれか。北、八を引きのけ、四つばひになつて、柱の穴へからだ半分ほど入れかけて、一向ぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の鑢

ひよんな事 妙な事。



大佛の柱くゞり (自修文)

が横腹につかへて、痛みこらへ切れず、彌次郎顔を眞赤になし、あいた、あいた。こりやひよんな事をした。北、おや、どうした。ぬけられねえか。彌、これ、手を引つばつてくりや。北、は、は、は、こいつはをかしい。彌次郎の両手をぐつと引つはる。彌、あいた、あいた。北、弱い男だ。ちつと辛抱するがいい。彌、あとの方から足を引いてくれる。北、承知々々。とうしろへ廻り両の足を捕へ、やあえんさあ、やあえんさあ。彌、あいた。北、ちつと堪へなせえ。よつほど出かけたやうだ。やあえんさあ、やあえんさあ。彌、あ、待つてくれ。待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。こりややつはり前の方から引出してくれ。といふ故、北八又前へ廻り、両手を捕へて引く。北、や

大佛の柱くゞり (自修文)

初手  
はじめの時

算段  
くふう。かん  
がへてだて

瀬  
折。時節

あの人  
あの方

あえんさあ。やあえんさあ。それ又こつちへよつぽど出て来た。」彌  
「こりやたまらぬ。あいたく。北八これではいかぬ。初手のやうに又  
あとへ引戻してくれ。」北「え、いろく。なことをいふ。」と又後から  
足を捕へ、やあえんさあ。やあえんさあ。彌「待てく。こりやど  
うでも前の方から引いてもらはう。」北「え、そんなに前へ廻つた  
り後へ廻つたり、引出しては引戻し、いつまでもはてしがねえ。こり  
やいい算段がある。」そばに見てゐたりし參詣の人を頼みて、北「も  
し、どうぞこつちからおめへ引張つて下さいませ。わしがあつちへ  
廻つて、足を引きずり出しますから。」彌「ばかあいふな。両方から引  
張つては出る瀬がねえ。」北「出る瀬がなくても、両方から引張ると、  
前へ廻つたり、後へ廻つたりするせわがなくていいわな。」參詣の人「い  
や、両方からあの方の骸を引伸ばしたら、つい出られさうなもんぢ  
やあろぞい。」北「こりやいいことがある。酔を一升も買つて来て、彌  
次さんおめへに吞ませよう。」彌「なぜ酔を吞むとどうする。」北「は

いうたてて  
いうたとして  
いんま

土砂  
加持(一種の  
療治)につか  
ふ砂  
一番の桶  
一ばん大きな  
桶。こころでは  
棺桶をいふ。

こたはる  
つかへる。

て酔を吞むと瘦せるといふことだから。」參詣の人「は、は、は、そないな  
事いうたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ  
どこぞへいて、槌借つて来さんして、頭を後の方へ打込まんしたが  
よいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命  
があるめえ。」參詣「されば、そこはどうも請合はれんわいの。こりや、わ  
しが智慧借そわいの。何ぢやろと、あの方のからだを柔にして、引  
出すがよかろさかい、かうさんせ。土砂もて来てかけさんせいの。」  
田舎者「すんだら土砂のうぶつかけずと、一番の桶さあ買つて来なさ  
ろ。手足をちとべしよん曲げたらはいるべいのし。」彌「え、いめえ  
ましい事をいふ。むだどころぢやあねえ。北八、早くどうぞしてくれ  
ぬか。」北「待ちなよ。は、あ、おめへ脇差の鐔が横腹へこたはつて、い  
てえのだ。」と手を差入れてひねくり廻し、やうく脇差をぬいてと  
る。彌「いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。」北「どれ、いや、  
時にどなたぞ前の方から押出して下さいませ。わしが足を持つて

あな おそろし  
 性(一)の穴に、感  
 動詞の「あな  
 を言ひかけて  
 ある。  
 (一)大佛の南、蓮  
 華王院の寺の  
 名。三十三間  
 堂は、その本  
 堂に北を建て、  
 南に柱を立て、  
 計三十六間の  
 長さがある。  
 長寛三年(一  
 〇八四年)再  
 白河法皇創建  
 九〇五年(一  
 〇五〇年)再  
 建。  
 (二)九著、江戸  
 神田の町、江  
 次郎兵衛、人  
 八の旅行記に  
 よせて、江戸  
 時代の東海道  
 道中の風俗を  
 おもしろく書  
 したものである。  
 ついたもの。

こつちへ引出しますから。やあえんさあ。やあえんさあ。」<sup>(一)</sup> 参詣<sup>(二)</sup>それ出  
 るわいの。まちつとぢや。いきまんせ。」<sup>(三)</sup> 彌<sup>(四)</sup>あ、うく。」<sup>(五)</sup> 北<sup>(六)</sup>は、<sup>(七)</sup>、<sup>(八)</sup>  
 出る奴がいきむから大笑だ。」<sup>(九)</sup> 彌<sup>(十)</sup>あ、いてえく。」<sup>(十一)</sup> 北<sup>(十二)</sup>しめたぞ。えん  
 やあ。えんやあ。そりや出たぞく。」とやうく<sup>(十三)</sup>の事にて引出せば、彌  
 次郎は大汗をふきく、ほつと溜息つきながら、やれく<sup>(十四)</sup>ありがて  
 え。こりやどなたも御苦勞でござい申した。生むよりか生まれる身  
 はよつぽどせつねえ。これ、着物が擦切れて、あばら骨が今にびりび  
 りする。」

傘さして出るお鼻よりはしらなる

あな おそろしや身をすほめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、<sup>(一)</sup>蓮華王院  
 の三十三間堂にて、

いやたかに五重の塔にくらべ見ん

三十三間堂のながさを。

(二) 東海道中膝栗毛

六 千石船

有本芳水

千石船に帆をあげて、

春日うらく島めぐり。

海は霞にうすぐもり、

さくら鯛うく波の上。

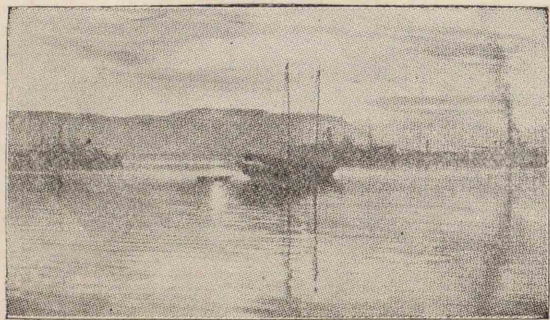
うす紫の島のはて、

潮風さつと鳴るまゝに、

龍の宮居のあらはれて、

浦島の子もかへるらん。

大島、小島、はなれ島、



千石船

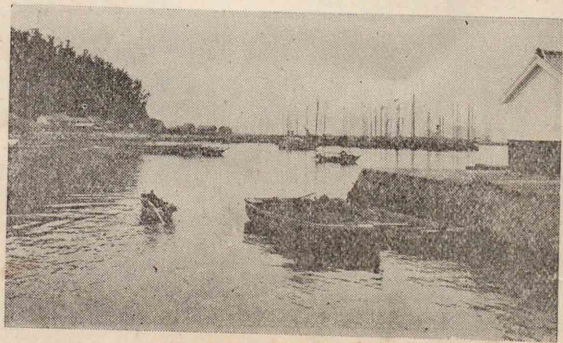
龍の宮居

めぐし

(一)香川縣仲多度郡  
(二)國幣中社金刀比羅宮。香川縣琴平町にある。

磯にまろべるうるはしき  
小さき石のいろどりに、  
夢もめぐしき春の旅。

船は着きたり讃岐路へ。  
(一)多度津は歌によきところ、  
(二)金比羅まゐりの人々に、  
遍路の人まじるかな。  
寺をめぐりてかへり來る  
順禮の子のおひずるは、  
ふた親のあるあかね染  
ひらりと風にひるがへる。

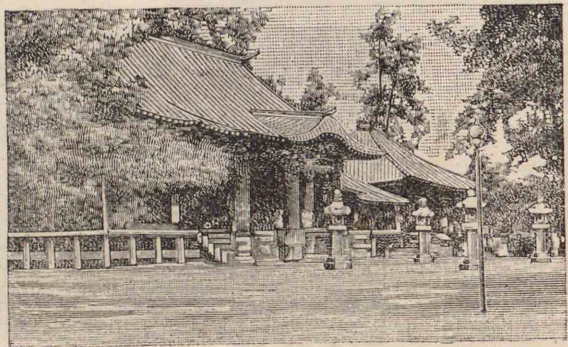


多 度 津

名だたる  
歌まくら

(一)志度寺。香川縣志度町にある。眞言宗。

はるく、阿波にかへるてふ  
若き女の藍賣は、  
ひかりまばゆく落つる日を、  
のぞみて涙ながしたり。  
鳥もむなしくなりぬれば、  
詣づる人もまれく、  
(一)志度の御寺に花散りて、  
老いにけるかなこの春も。  
きざはしたかき金比羅や、  
ここは名だたる歌まくら、



志 度 寺

青葉がくれにちらりと、  
櫻の散るもあはれなり。

宮の欄間にとびて啼く

鶯の音のさびしさよ。

あゝ、行く春の悲しさを、

われももろともうたひ見ん。

— 旅 人 —



金刀比羅宮

### 七 潮の岬

杉村廣太郎

(一) 紀伊國最南端の岬

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた

見る目遙か

磯馴松

一面の芝生が見る目遙かにうち續いて、その間に薊、蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぼつりぼつりと所々に立つてゐて、それに繋いだ牛の姿がいかにも春めかしい。村の少女子がこの芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑聲が遠くから聞える。右の方には燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓が、さながら崖から落ちかゝるやうな所に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく並んで、これに太平洋の大波がどろどろと、寄せては返し、寄せては返してゐる。

山骨

寄せては返し寄せては返す

僕等は今日日本の本土の最南端の一角に立つた。うち開け

煙波縹渺

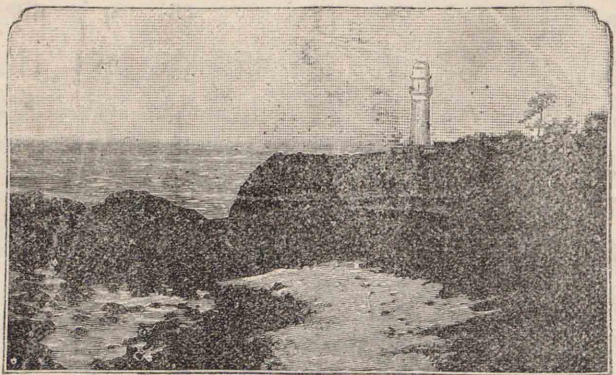
(1) New Guinea.  
又グニアとも  
いふ。

(2) California.  
アメリカ合衆  
國の一州。  
(3) Los Angeles.  
日本人も多く  
住んでゐる都

た太平洋の海面、煙波縹渺として、そのはてをいづことしも  
覺えぬ。地圖を按ずるに、ここから正南は恰も蘭領印度のニ  
ユーギニアを隔ててオーストラリヤの大陸に相對し、東は  
遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北アメリカはカリフォ  
ルニヤ州のローサンジェルスマで、間を遮るものもない。日  
本の南端の一角といふと、いかにも世の中から棄てられた  
所のやうに聞えるが、その實この一角が即ち日本と世界と  
の接觸する所である。

まづこの岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船  
舶にその針路を示してゐる。ここの無線電信局は、日々夜々  
に世界と相語つてゐる。更に海洋の望樓に至つては、夜とな

く晝となく、苟もこの下に船の影さへ見えたなら、内外いつ



潮の岬の燈臺

らも世界的の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今

(一)明治四十二年四月

(二)Kent. イギリス東南端の一州

日四月の二十二日。去年は愈、ニューヨークの見物を終つて、明日大西洋に乗出さうとした日。一昨年はちやうど今頃パリからロンドンへ向かふ途中、海峽を過ぎてケント州の櫻桃杏、梨今を盛に咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓で頻りに信號旗が揚る。それと急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばち／＼とけたましい音を立てて、電信をかけてゐる。今まで静まり返つてゐたこの日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。

沖には通報艦の淀が行く。

へちまのかは

### 八 少ピット

双肩に擔つて起つ  
國歩艱難  
不世出の英才  
William Pitt.  
(二)チャタム伯  
(Earl of Chatham.)  
(西曆一七七八年)

神童

西曆一千七百五十九年五月、天は英國の爲に、將來その國を双肩に擔つて起ち、國歩の艱難を救ふべき不世出の英才を下した。ウィリヤム・ピットは即ちその人である。彼は當時の長老政治家として畏敬せられた老ピットの第二子で、父に對して少ピットと呼ばれてゐる。

少ピットは幼時から身體が弱かつたが、その才智は非常に發達して、夙に神童を以て許されてゐた。尋常の小兒のやうに戸外で遊戯するのを好まないで、常に書籍に親しみ、これを何よりの快樂とし、熱心なウィリヤム。又は「少年哲學者」

の綽名を得た。單に記憶力の優秀であつたのみでなく、その思慮、判斷も、少年時代から老熟してゐた。老ピットが功勞によつて伯爵を授けられた時、僅かに七歳の少ピットは母に向かつて、私は次男に生まれたのが喜ばしい。父上のなきつたやうに、花々しく下院で働くことが出来るから。こいつたさういふ。貴族の長男はその家を繼ぐので、下院の議員たる資格を得られないからである。

ピットは十五歳でケンブリッジ大學に入學したが、その學才は忽ちにして同輩を凌ぎ、學長をして舌を捲かした。しかのみならず、その起居の端嚴なことは、他の學生の模範であつた。

Cambridge  
英國の有名な  
大學。英京ロ  
ンドン市の東  
北四十八哩に  
ある。  
舌を捲く

永眠

時局

いち早く

老ピットの永眠は少ピットが十九歳の時であつた。父が時局の困難な問題の爲に、重い病の床から出て議場の演壇に立ち、最後の大演説を試みた時、少ピットの若い眸は、熱心



と敬愛に輝いた。演じ終つて父が卒倒した時、いち早く駆け付けて介抱したのは少ピットであつた。父は再び起たなかつたが、その精神はその子に傳はつて、更に偉大な力を發揮した。

子は父の偉業を繼ぐことを生涯の目的とし、父は我が子の自分よりも有爲なるべきを知つてゐた。父の歿後、ピットは益々精勵して、學才を磨き、辯舌を練り、二



好奇の視線を注ぐ

十一歳の時、早くも議員の總選舉に選ばれて、下院の一議席を占めた。かくて始めて壇上に立つて處女演説を試みた時、滿場の人はこの少壯議員に好奇の視線を注いだ。その鮮な論旨、きつぱりとした態度、銀鈴を振るやうな美聲に、一同酔へるが如く、感歎の聲は堂を揺がすばかりであつた。

聲望

ピットの聲望は日を経るに隨つて高まり、一千七百八十二年には推されて内閣の一員に列し、越えて八十三年十一月には遂に内閣總理大臣となつた。時に年二十四歳。餘りの青年であるから、國民中には輕侮と危惧の念を以てこの内閣を迎へたものもあつたが、己を信ずることの飽くまで篤いピットの才力と愛國心は、快刀亂麻を斷つ勢を以て、當時

危惧

快刀亂麻を斷つ

信望

の紛亂を解決し、漸く國民の信望を得、十七年の久しきその内閣を持續した。二十四歳の壯齡で首相となり、よく國家の危殆を救つたこの人に比肩し得べきもの、古來各國の政治家中、果して幾人あるであらうか。

國利民福

ピットは一方には内政に意を用ひ、實業を振興し、財政を整理し、交通を改修して、國利民福を進めるとともに、他方には外國との巧妙な折衝によつて、大英國の地歩をして確實鞏固ならしめることが出來た。殊に晩年に於て苦慮したのは、佛帝ナポレオン一世との對抗であつた。當時ナポレオンは殆ど全歐洲を席卷した勢を以て、英國をうかぶつたが、ナポレオンの雄圖を以てして、なほ英國の本土に一指を染め

折衝

全歐洲を席卷す

一指を染む

畫策

<sup>(1)</sup>Tratagar. スペイン、西南端の海角、一八〇五年この沖で海戦は行はれた。

<sup>(2)</sup>Horatio Nelson.

英國の海軍提督(西暦一七八〇—一八〇五年)

<sup>(3)</sup>Waterloo.

今のベルギーの村、一八一五年の西暦一八一五年。

死命を制す

<sup>(4)</sup>Arthur Wellington.

英國の將軍且政治家(西暦一七八九—一八五二年)

勇猛心

得ず、終に怨を呑んで没落の悲運に陥つたのは、ピットが病弱の一身を以て國難に當り、内に國民の愛國心を鼓舞し、外に名將勇卒を送り、畫策大いに努めた偉功に歸せねばならぬ。<sup>(1)</sup>トラファルガルの海戦に佛國の大艦隊を全滅させたネルソン提督も、<sup>(2)</sup>ウォーターローの陸戦にナポレオンの死命を制したウエリントン將軍も、その初は實にピットの人を見る明識によつて推舉せられた人々であつた。

生來虚弱なピットは、不斷の勇猛心を以て多年國事に奮闘したが、一千八百六年、四十六歳を以てその光榮ある一生を終つた。當時ナポレオンの勢力はなほ盛であつて、聯合軍の敗報は頻々として來た。ピットは重病の床上、その報知を

得ることに、深く國家の前途を憂へて、心を傷ましめた。今はの時に、おゝ我が國家よ」と一言の叫をもらしたといふ。ピットは實に短命であつた。けれどもその愛國の至誠に燃立つた精神は、永く大英國の國民の心に生きてゐるのである。

### 九 英京に於ける東宮殿下 その一

<sup>(1)</sup>五月十一日、水曜、晴。我が皇太子殿下には午前十一時御出門、陸軍御正装で、英國皇太子殿下と御同乗、公式鹵簿を以て、ロンドン市役所の歡迎會に台臨になつた。<sup>(2)</sup>閑院宮殿下を始め、供奉員一同も隨伴した。<sup>(3)</sup>バックingham王宮から會場たるギルド・ホールに至る里餘の間、市民は山をなして道の両側

<sup>(1)</sup>大正十一年。

台臨

<sup>(2)</sup>元帥陸軍大將載仁親王。

<sup>(3)</sup>Buckingham.

Guild hall.

に佇立し、その歓迎は御入京の時に比して更に一層の熱烈を加へ、殿下は全く御答禮に御違のない有様であつた。

抑この市役所の歓迎會ほど、在留

邦人及び供奉員の心に、深刻な、強烈

な緊張味を與へたものは、御外遊中

他になかつた。實にこの日こそ我が

東宮殿下が始めて英國國民環視の

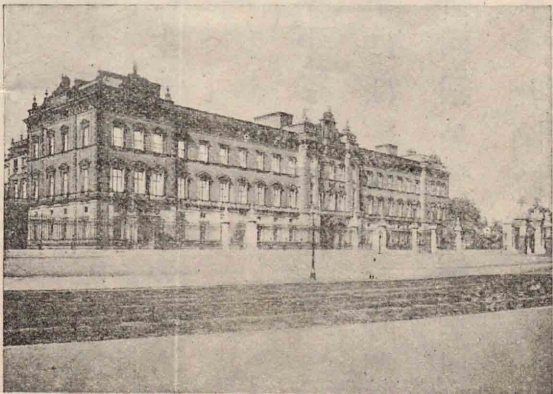
中心とならせられる日であり、又殿

下としては御生涯の中に今日始め

て一千名に近い外國知名の士の面

前で、殊に歴史的由緒ある公會堂たるギルド・ホールで歓迎

深刻  
緊張味



宮王ムガンキッバ

の辭を御受けになる日である。在留日本人の一人は、その前

日私に向かつて、東宮殿下は

ギルド・ホールで十分その御

大任を御遂行になつて下さ

ればよいが」と、頗る心配氣に

もらしたのであつた。この言

葉は殿下に對して誠に失禮

なやうではあるが、しかし我

私の尊愛措かざる東宮殿下



ふる向へルーホ・ドルギ簿函

が、しかも九重の雲の奥深く生立ち給ひ、御年漸く二十に渡  
らせられる殿下が、今まで全く御經驗のない晴の場所たる

このギルド・ホールにお立ちになる前に、誰かその御演説について、將又御態度について、憂慮なしに考へ得られよう。……恐多いことながら、假に殿下の御音聲がお低くあつて、ホール全體に通らなかつたとせよ、——假にその御態度がいつになく御落ちつきがなかつたとせよ、——假に御聲が顫へたとせよ、——私ども御側近く奉仕する者は、そんなことは有得ない事と信じてはゐるもの、なほ多少の興奮を禁じ得なかつたのである。まして殿下の御性格を十分に存じ上げず、又御親しみ申し上げる機會が甚だ少かつたこの在留民の某氏が自然にもらした言葉は、恐らく日本國民一般の憂慮であつたに相違ない。しかもこの感情は何も對國的

に、殿下の御態度を心配するのではない。たゞ「我等の殿下が、どうぞ立派におやり下さればいいが……。」といふ自他の觀念を超越した、心の奥底からこみ上げて來る本然の叫であつたのだ。

この日は最も改つた公式の歡迎會である。古色を帯びた公會堂には、隙間もなく來會者が着席してゐた。

殿下が御入堂になると「君が代」が奏せられ、會衆は一齊に起立して、殿下を奉迎した。

殿下は市長の御案内で、供奉員一同を隨へさせられ、會衆敬禮の間を靜々と御通過になり、數段高い演壇上に設けられた御席に御着きになつた。

市長夫妻その他吏員の大禮服の古風なさまは、連綿たる歴史の頁を貫いて今日に至つた迹を語つて、羨ましいほどのあこがれを感じさせた。

御席は演壇上の前端に一つ離れて設けられ、その後には市長夫妻の椅子があり、更にその後には英國側の皇族貴賓の席と、日本側の高官及び供奉員の席が置かれた。

御伴の者が殿下にお續きして所定の座席に着くと、會衆は漸く腰を下した。さすがに大國民である。私語するものもなく、齊しく靜肅に殿下を見上げてゐる。實に一種いふべからざる崇敬さを覺えた。

殿下はたゞ御一人孤立した御席に、頗る御沈着な御態度

で、儼然御椅子に御倚りになつてゐる。私どもはこの時何ともいへぬうれしさを感じた。「あゝ立派な御態度だ。」と感歎するとともに、我に歸つて在留日本人の會衆の一團を見た時、皆緊張した氣分を漲らして、殿下の御姿を御見上げ申してゐた。

### 一〇 英京に於ける東宮殿下 その二

やがて市長は恭しく殿下の御前に進んで、次の歡迎文を朗讀した。

謹ンデ日本皇太子殿下ニ言上ス。

ロンドン市長、市參事會員及び市會議員ハ、ロンドン市會ヲ召

集シ、我が皇帝ノ忠實ナル同盟國タル日本國皇帝陛下ノ聖慮ニヨリ、殿下ガ遙々我が國へ御來遊アラセラレタルコノ光榮アル機會ニ於テ、ロンドン市民ヲ代表シ、欣喜シテ殿下歡迎ノ誠意ヲ表シ、併セテ日本皇帝陛下ガ大戰中陸ニ海ニ同盟及ビ聯合諸國ニ與ヘラレタル援助ヲ深ク感謝ス。

吾人ハ齊シク雄壯ナル貴國陸海軍ノ赫々タル武勳ニ對シ、我が全國民ノ感ズル賞讚ノ意ヲ表明スルノ機會ヲ得タルコトヲ欣ブ。

殿下今回ノ御來遊ガ愉快ニシテ且有益ナルトモニ、貴我兩國間ニ現在スル友情ヲ益鞏固ナラシムルノ力アルベキヲ信ズ。終リニ臨ミ、ロンドン市民ハ偉大ニシテ聲譽高キ貴國民ヲ景慕シ、ココニ日本帝國及ビ開關以來連綿タル貴皇室ノ隆昌盛運ヲ奉祝スルノ誠意ヲ表ス。



下殿宮東るけ於にルーポドムギ

殿下は御椅子より御立ち遊ばされて、演壇の前端にまで御進みになり、徐に會衆一同に御目を御配りになり、軽く御會釋の後、まづ陸軍の前立ある御正帽を左腋下に挟み、陸軍正規の鹿革の厚い御手袋を左手に御穿ちになつたまふ、御答辭の草稿の巻紙を御開きになつた。然るに、用紙が厚い爲、御開きになると、一回、二回までも、紙の撚が舊に戻つて、甚だしく御面倒のやうに拜せられた。私どもはこれを拜して、腋下に御帽子を御挟みになつて御出でだけに、さぞ御扱ひにくいことであらうと、胸を轟かせながら見上げてゐたが、殿下は益々御落附きになり、二回、三回とよくその紙を引延べ遊ばして、實に音吐朗々と、しかも諧調ある抑揚を以て御演説

になつた。その間満場は眞に水を打つたやうな靜肅で、會衆は醉ふが如く殿下の響き渡る御聲を伺つたのであつた。御演説が濟むと、待構へてゐた會衆は、一齊に拍手して、暫くは鳴りも已まなかつたのである。

あゝ、この時の印象といふものは、眞に私どもが一生忘れることの出来ないものであらう。感激と名づけるさへ餘りに限定的に、餘りに説明的になる虞がある。たゞ名づけやうのない涙が、知らず識らず泉のやうに眼底に湧くのを覺えた。會衆の日本人の群はと見れば、皆喜悅の笑顔といふよりは、寧ろ感謝の念にすべてを包まれたといふやうな顔付をしてゐるやうであつた。

限定的

著者は後で、彼の那須與市が源平屋島の戰に敵の舟に掲げた日の丸の扇を射る爲に、靜々と馬を波間に乗入れて、將に矢を番へて放たうとしたあの刹那の身方の心持は、さては首尾よく扇を射貫いた時の身方の心持は、我が東宮殿下の御答辭案を御手にして御起ちになつてから、御終了になるまでの我々日本人の心持であつたらうと、恐多い事ながら、ふと胸に感じたのであつた。

東宮殿下の御答辭の意は次の如くであつた。

ロンドン市長及び自治體ノ諸君

予ハコノ大都市ノ市民ヨリ受ケタル歡待ニ對シ、感激ニ堪ヘズ。深キ感謝ノ念ヲ以テ、コノ歴史的建物ノ内ニ立ツ。予ハ深厚ナル感謝ヲ以テ、貴下ガ市民ノ名ヲ以テ予ニ與ヘラレタル歡迎ノ



辭ヲ領セリ。

予ハ同盟國トシテ同一ノ目的ノ爲ニ、トモニ戰ヘル有事ノ日ヲ莊重ナル感謝ヲ以テ回想ス。

予ハ今ヤ戰爭ノ終了ヲ告ゲタルヲ喜ブト雖モ、吾人ノ責任ハナホ重大ナルヲ知ル。蓋シ平和ト正義トノ統治ヲ永久ニ建設セシムルニ注ゲル數萬同胞ノ血ニ酬ユベキハ、全然吾人生存者ノ義務ナレバナリ。

コノ行、予ガ始メテノ外遊ニシテ、過去二十年間吾人ノ誠實ナル同盟國トシテ、將又ソノ友誼ニオイテハ、東洋ノ平和ヲ鞏固ナラシムル大業ヲナスニ決シテ缺クルトコロナカリシ大國民ヲ始メテ訪問スルハ、予ノ眞ニ欣快トスルトコロナリ。

諸君、終リニ臨ンデ宏大ニシテ且名聲アルロンドン市ノ爲ニ、常ニ繁榮ト幸福トヲココニ表明スルコトヲ予ニ許セ。

(一)林權助

(i) Mansion House.

林駐英大使はこれを英譯して朗讀した。

式が終つて殿下には式場から程近い市長公邸なるマンション・ハウスに於ける市長主催の午餐會に列せられ、こゝでも一場の御挨拶の御交換があつた。列席者は我が兩殿下、英國皇太子殿下、英國第二皇子ヨーク親王殿下、内閣閣員、市の高級吏員及び我が供奉員一同、その他日英の知名の人々を合はせて、約三百餘名を算した。

この席上に於て相會した日本人は、相識るものも、相識らないものも、一樣に今日の殿下の御演説の御成功を心から祝し合つたのであつた。

——皇太子殿下御外遊記——

佛國戰跡の御巡覽 (自修文)

六月二十三日、我が皇太子殿下には御供の人々を随へて、早朝アルサスへ向けて、パリの御旅館を御出發になりました。

アルサスはもと佛國の領内にあつたのですが、今より五十年ほど前、普佛戦争で佛國が負けた結果、ローレンとともにプロシヤへ割譲したのでした。アルサス、ローレンの兒童は、その日限り廢せられるフランス語の讀本をひしと抱いて、放さうともしなかつたのを、ドイツの役人は片つばしから奪ひ取つて、悉く火の中へ投入れた。兒童はあつけにとられて、泣出す力もなく、ぼんやりと、自分の讀本がぶすくとくすぶつて、やがて火になつて、めらくと焼落ちるのを見つめてゐましたが、今まで山のやうに積上げられた讀本がすつかり焼けてしまつて、跡にはたゞ冷たい灰がちよんぼりと残つてゐるのを見て、始めてわつと聲を立てて泣いたといふことであります。

[Alsace.]

(二)西曆一八七〇年、プロシヤ國に對して宣戰した。フランスの敗北に歸して、一八七一年終つた。

(三)Lorraine.

(四)Prussia.

(普魯西)

[Metz.]

アルサス、ローレンの首都メッツ。西曆一八七〇年、佛將バゼンヌがここに據つて、普軍の包圍攻撃を受け、七十二日の後に開城した。

(一)Marschal.

Pekin.

フランスの名將、西曆一九〇六年、エルクマン要塞の防禦司令官となつた。遂に最後の勝利を得た。

(三)Marsailleise.

颯爽

さつぱりとして威勢のよい。

その子供等がもう六十前後、白髮の老人になつたらうといふ千九百十八年十一月十九日、世界の大戦が休戦になつて、佛軍が思ひの深いメッツの城市に入つた時は、五十年一日の如く待ちに待たれてゐたアルサス、ローレンの人民は、心の奥からこみあげる歡に胸を躍らせて、フランス共和國萬歲、ペタン元帥萬歲を絶叫しつゝ、手に手に手巾を振り、帽子を振り、フランス國旗を打振りつゝ、歡迎する。その中を仰へても抑へきれない強烈な歡に勇ましい面を赫かしながら、佛國の國歌マルセエーズを奏する軍樂隊を先頭に、凱旋軍のペタン元帥が、陸軍大將の正裝に青色の外套を一着なし、白馬に跨がつて雄姿颯爽として入城した光景は、聞くも血の涌く痛快の極みである。五十年の間懐かしいフランス語を學ぶ自由をさへ奪はれてゐた人民は、今こそ天下晴れて大聲に、フランス語で萬歲が唱へられたのであります。そのペタン將軍がこの度は我が皇太子殿下の爲に、戰跡の御案内役を承つたのであります。

(1) Strasburg.  
 アルサス、ロ  
 レンの都  
 三色旗  
 フランスの國  
 旗。赤、白、青  
 の三色から成  
 る。

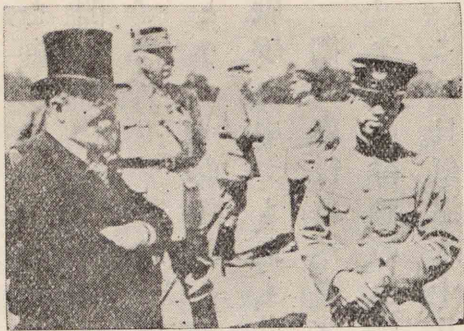
(2) Rhine.  
 アルサス、ロ  
 レンとドイ  
 ツの境を流れ  
 る。

(3) Poplar.

列車はドイツ語で書いた町の名札や看板の今に残つてゐる小  
 さな驛を通つたり、百姓の鋤を執つてゐる田舎の村を過ぎたりし  
 て、十時頃にストラスブルグに到着しました。パリの賑やかな町に  
 比べて一段と眼についたのは、寂しいこの町が隅から隅まで三色  
 旗で飾られ、近所の村々から集つて來た老若男女が、道々に人垣を  
 作つてゐることでありました。午後は日佛兩國旗で飾つた小蒸氣  
 船に召されて、有名なライン河の上流をお下りになりました。滴ら  
 んばかりのポプラの緑が兩岸から河を挟んで居ります。左岸の緑  
 は喜ぶが如く、右岸の緑は悲しむやうに眺められたことでありま  
 せう。

一時間ほど立つて船がガンシヤムといふ鄙びた一寒村に止り  
 ますと、白服を着けた村の少女が二人、殿下の御前に出まして、紅白  
 の薔薇で作つた花束を捧げました。この時ペタン將軍の目に涙が  
 宿つてゐたやうでありました。

それから村の子供の群の唱歌に迎へられて、村役場の歡迎會に  
 成らせられました。が、むさくろしい老人たちにまで一々御會釋を  
 賜はりました。その夜殿下がストラスブルグからメッツに御着き



東宮殿下とバルツ及びペタン元帥

遊ばしたのは、十時少し過でありました。  
 翌二十四日殿下は佛國陸軍の請に應じ  
 て、メッツ駐屯軍を御檢閲遊ばしてから、す  
 ぐ演習を御覽になりました。

この演習といふのは、今より三年前、千九  
 百十八年に歐洲大戰でドイツの軍隊が總  
 崩になつて退却する時の決勝戦を、そのま  
 ま御覽に入れるのでありました。それは一  
 時退却を中止して、二線を引いて應戦して來る敵に對して、装甲車  
 十臺、歩兵一千人を以て佛軍が猛然として進撃し、遂にこれを撃破  
 するところでありました。陸軍卿バルツ氏とペタン元帥とが、とも

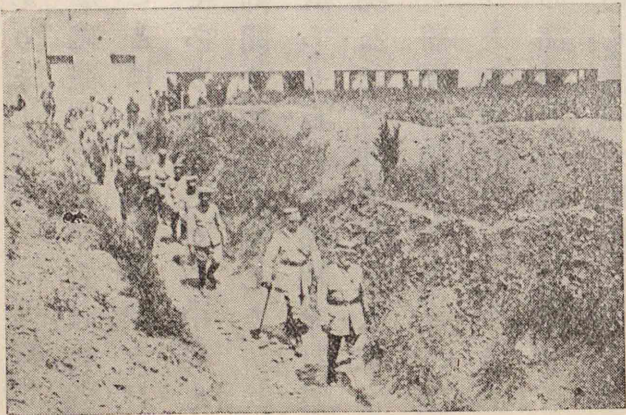
Verdm.

に御説明申し上げました。殿下は殊に怪物の如き装甲車が砂塵を蹴立てて進む有様に、御目を留められたやうに見受けられました。二十五日早朝殿下にはメッツを御出發、<sup>(一)</sup>ヴェルダン戦争の跡を御訪ひになりました。ヴェルダン要塞は、普佛戦争の時には、六週間プロシヤ軍に落されてしまつたのでしたが、この度の大戦争では、ドイツ軍が一箇年の間これを攻撃し、十數回の劇戦をしたが、とうとう攻落すことが出来ず、退却をしてしまひました。今度の大戦争の中でも、最も壯烈凄慘を極めた所でありました。

御案内役のペタン將軍は、この戦場での花形でありましたので、さすがに得意の色がその輝く顔に漂つてゐました。この日氣温八十八度、連日の好天氣に道路の乾き切つてゐる中を、九臺の自動車行列ねて、まづ十萬の佛國將卒を埋葬した墓地に成らせられ、殿下はパリの凱旋門に捧げられたと同じ花環を捧げられ、特に鄭重な日本式の敬禮を遊ばされました。

Meuse.  
Vaux.

それから<sup>(一)</sup>ミューズ右岸の<sup>(二)</sup>ヴォー砲臺を御訪ひになりました。ヴォー砲臺は、佛獨兩軍で取りつ取られつ、幾回となく激しい争奪戦を繰返した所で、終には同じ地下室の中で、上部は獨軍これを占領し、下部は佛軍が立てこもるといふほど極度に接近し、多數の犠牲を出したのであります。その邊一帶は到る所兩軍劇戦の跡を語らぬはなく、見渡す限り野菊や<sup>(三)</sup>虞美人草や<sup>(四)</sup>瞿麥が亂れ咲いてはゐますが、その一つ一つの葉にも花にも、過ぎし日の血なまぐさい匂が、しみこんでゐるやうでありました。その中を殿下は一行とともに拾ひ遺しの不發彈や、野ざらしの白骨に注意せられつゝ、御進みになつて、砲臺に御



覽巡御の跡戦ンダルエヴ

着きになりました。折しも遙かの麓に當つて、轟々たる爆聲が起りました。聞けば今なほあちらこちらに埋つてゐる大砲の彈丸を、掘起しては爆發させてゐるのださうでありました。

やがて殿下は蠟燭をおつけになつて、砲臺内の地下室に御入り遊ばされましたが、その洞窟の陰慘なことには、當時の有様を目前にありくと思ひ浮かべられたのでありました。この中でもペタン將軍は詳しく戦争當時の實況を御聞きに達しました。

それから殿下はヴェルダン市街に成らせられて、屋根を打貫かれた博物館や、見る影もなくなつた寺院などを御覽の上、大戦當時の英佛軍司令部を御訪ひになり、ペタン將軍の起居してゐた室にも成らせられて、將軍の勞苦をしみじみと御犒<sup>おご</sup>ひ遊ばされました。

午後は方面を轉じてミューズ左岸の高地を御視察になりました。ここは四箇月に亘つて佛獨兩軍が最も激烈な戦闘を繰返した所で、ここだけで佛軍が四十萬の兵を喪つたとのこと。附近の村落

は今なほポンペイの廢墟より甚だしい慘狀を呈してゐます。

〔Pompeii〕  
古代イタリ  
の都府。西曆  
七九年八月  
エスヴィヤス  
山の噴火で埋  
没した。一埋  
六八九年發見  
漸次發掘せら  
れた。

〔Monte  
Forson.〕

殿下は無心の雲雀が中空に高く飛んで、朗かに囀つてゐる聲を耳にしつゝ、假小屋の納骨堂に成らせられ、ペタン將軍が發起した記念弔魂堂の建設費に、御手許から御寄附をなさいました。それから淋しく花の咲亂れてゐる廣野を横ぎつて、當時ドイツ皇太子の展望臺として用ひられたモン<sup>(一)</sup>ト<sup>(二)</sup>フォルソンの天文臺を御訪ひになりましたが、その邊の家はすつかり荒果てて、人が住めさうにも思はれず、僅か一軒住残つてゐるあばらやの主人は、慘ましいほど落ちぶれて、戦跡で拾つて來た砲丸や帽子や、さては繪葉書などを旅人に賣つて、漸くその日を暮してゐることでありました。

その夜バリへお歸りになつて、例の如く親ら日記を御記し遊ばしましたが、當日は御母后陛下の御降誕日であり、淳宮殿下の御誕辰に相當するので、遙かに内地の事をも思ひ浮かべさせられたやうに見受けられました。

(1)Somme  
(2)Reims.

その後ソムム<sup>(1)</sup>、ランス等の戦跡を隈なく御巡視遊ばした後、七月七日久しく御滞在になつた佛國に名残を惜しませられつゝ、イタリヤへ向けて御出發になりました。その時殿下は佛國の新聞を通して、告別の辭として佛國人の勇氣と努力を稱揚せられた後、余が最も深い印象を受けたのは、ランス、ヴェルダン等の荒果てた戦場の有様である。戦争を讚美するものは、この有様をまのあたり見ていかに思ふであらうか。」と仰せられました。  
——中等國文教科書——

一一 若さ

高村光太郎

若いのはいい。何か知りたくて、知りたくて、また遊びたくて、遊びたくて、疲れるといふことが疲勞でなくて休息であるほど、若いのはいい。若い人を見てゐると、自然と心が腕を伸して來て、しまひに思はずほゝ笑まされる。若い人のみ

づみづしきは、色々な意味でこの世を救ふ。

だが恐らく若さの美德を若い人に説くほど變なものがあるまい。若さの眞中にある時若さの價を聽かされるほど、をかしたものはあるまい。餘りあたりまへ過ぎる事を聞く氣がして、何の不思議も感ずまい。あゝ、かういふ無自覺はほんたうに貴い。力強い。

無自覺

若さの美德を痛感するのは、若い人のことではない。やがてひとりでにそれを感じる時代が來るのだ。若さのよいのは、若さを持つ時ばかりでなく、若さをしのぶ時でさへよいのである。若さを自知せぬ若い人よ。君たちの體力の續く限り、精神力の續く限り、自分の内からの疲<sup>ひま</sup>しくない慾望の聲

道德律

に忠實であるがよい。何が疚しいか疚しくないかに外からの標準はない。自然は人間の心に自らそれを感じさせる仕掛を作つて置いた。一番よく自分の内の聲を聴く者が一番正しい生活に入ることになる。人間世界の道德律は、さうやつて自然に出来たものだと思ふ。若い人が「淨さ」に敏感であるのは、人間本能のいかに信賴すべきかを説明してゐるのだ。若い人よ。君たちのその敏感さを守るがよい。力を盡して清淨に進むがよい。この世は清淨ばかりの世ではない。寧ろその反對のものが充滿してゐるにはあるが、しかも常に清淨であることを望んでゐるのだ。それが自然の植ゑた本能である。自分の淨さを守ると同時に、人の淨さをも守るがよい。

心おきなく

い。汚れたものは恕せ。自分の過を知つたら、心から自然にあらやまるがよい。そしてあとは忘れるがよい。若い人よ。みづみづしい氣力に満ちた人よ。君たちは心おきなく勉強するがよい。遊ぶがよい。君たちが必ず自然から君獨得の特質を興へられてゐることを信ずるがよい。君が君の良心に従へば、この世ではきつと戦はねばならぬことに出會ふだらう。その時、君の後楯に自然がついてゐることを思ひ出すがよい。勝敗は君が自分の内の聲に聴いたか聴かぬかにある。相手を倒したか倒さぬかにはない。立身出世教や成功熱は、人間の本能である。進展意志を悪用した罫である。これに引つかかると、魂を傷つけられる。立身出世の代表者のやうにせら

Abraham Lincoln  
米國第十六代  
の大統領  
西暦一八六〇年  
一月八日

れてゐるあのリンカンの美しい心事を考へて見ても、いかに立身出世教の耻づかしいものであるかがわかる。立身出世したリンカンは、決してそんな教を奉じたのではない。若い人よ、十分に腕を伸して、太陽を浴びて歩き給へ。悩む時には悩まねばならぬ。悩んでなほ且明朗でゐられる永遠に若い魂となるには、若い時の精神的鍛錬が肝要である。

### 一二 春の水

米つきをするとは見えぬ春の水。  
よつびいてひやうと放たぬ案山子かな。  
武者一人叱られてゐる土用干。

轉寢うつねの顔へ一冊屋根いちさふしにふき。  
本降りになつて出て行く雨やどり。  
孝行こうぎやうのしたい時分に親はなし。  
わらんちわらんちを穿くと二足踏んで見る。  
笑うたもあとからこけるすべり道。  
大佛は見るものにして尊うやまつます。

### 一三 武士道

大森金五郎

大和魂と武士道はどういふ風に異なるかといふに、大和魂とは日本の魂、即ち日本人の尊王愛國の精神を指していふので、武士道とは、源平時代から、大和魂が多く武人に依つ



(一) 歌人。聖武、孝  
謙、兩天皇の朝  
に仕へ、延暦  
四年(一四四)  
五年薨じ、  
この歌は萬葉  
集卷十八に載  
せられて、賀  
陸奥國出金  
詔書、歌一首  
にある。

本領

推賞

て現されたところから名づけられたのである。然らば武士道は源平時代に始つたものかといふに、決してさうではない。この精神は、我が建國以來の風といふべきで、萬葉集にも、<sup>(一)</sup>大伴家持の家庭教育に關する歌が載せてある。その大意は「大伴、佐伯の兩氏は武勇の家筋であるから、祖先の名をば汚さぬ覺悟で、赤き心を以て朝廷に仕へ、勅命を蒙つた場合には、海へ行かば屍を海に沈めても厭はず、山へ行かば屍に草が生じても厭はず、私なく仕へ奉り、大君の邊で死ぬのを本分とする。」といふのである。これが昔から日本の武士の本領であつたのである。前九年、後三年の役などに際しても、源賴義、義家父子によつて、武勇の精神が推賞鼓舞せられた。鎌倉

時代に至つては、取分け源賴朝が武士道を奨勵し、自身に質素儉約を以て衆を導いて行つたから、武士の風儀が益々良くなり、一種高尚な美風を生じた。

武士道といへば、強くさへあればそれで宜いといふわけではない。主従の恩誼を重んずるといふ事が第一義である。それから、一旦約束したことは、一命を棄ててこれを守り、また廉耻を尊び、人から卑怯だとか未練だとかいはれるやうなことがあるれば、腹をも切るだけの膽力がなくてはならぬ。これが當時の風であつた。源賴朝は常に扈従の武士を吟味して擇び、武士も扈従に加ることを名譽とした。賴朝は嘗ていふやう、二十矢を發して二十騎を射殺すほどの精兵でな

扈従

廉耻

譜代

弓馬の道

嗜

ければ、我が調度懸にすることは出来ぬ」と。調度懸とは、將軍の弓矢を負うて扈從する武士をいふのである。又「我が隨兵の侍は三徳を備へなければならぬ。三徳とは、第一に譜代の武士であること、第二に弓馬の道に熟達して居ること、第三に威儀容貌の立派であるといふことである」と。かやうなわけであるから、京都の公卿たちが、平安時代以來の風をうけて奢侈文弱に流れ、遊樂を事として居る間に、鎌倉武士は犬追物、笠懸、流鏑馬等を以て日常の遊戯とした。

さればこの時分の武士の嗜といふものは、自分は平素質素儉約を旨としてゐながら、數多の郎等を養ひ、良い馬を飼ひおき、一旦事變があつたらそれ等の郎等を率ゐて、主君の

爲に勳功を立てるといふことが、第一の目的であつた。しかし武士道を鍛錬するところから、自然粗暴になり易い爲に、これを十分戒めた。嘗て近江の佐々木高重が比叡山の僧侶に抵抗して、それが爲に死罪に處せられようとしたのを聞き、

源 頼朝はこれを憫み、その父定綱に悔状を送つた。その文の中に、

朝 「若き者の癖といひながら餘りに心とく、逸り過ぎたる者よと御覽せしに、案の如く心短く物騒がしく、父兄弟にも咎をかけ、天下の大事ともなれり。事の序なれば仰せらるゝぞ。定綱はなほも子供を持ちたれば、



源 頼朝

いで教へよかしと思し召すなり。武士道といふものは、僧などの佛の戒を守るなるが如くにあるが本にてあるべきなり。大方の世の固めにて、帝王を護り参らする器なり。又當時は鎌倉殿の御支配にて、國土を守護し参らすることにてあれば、錐を立つるほどの所を知らんも、一二百町を持ちても、志はいづれもひとしくて、その酬に命を君に参らする身ぞかし。私の物には非ずと思ふべし。さるについては、身を重くし、心を長くして、あだ疎かにふるまはず、小敵なりとも侮る心なくて、物騒がしからず計らひたばかりをするが能事にてあるぞ。云々と書いてある。これはよく武士の心得を書いたもので、武士の精神はかくあるべきである。

あだ疎か

平家は武人から出たが、早くから京都の公卿風を見倣つた爲、武士道は發達しなかつた。鎌倉時代の武士の風儀は、大略上述の通りであるが、後に京都から攝家の將軍や、皇族の將軍を迎へるに及び、數多の公卿たちもこれに附いて來たので、武士もこれに見習ひ、奢侈の風が行はれ、武士道も段々弛んで來た。ついで北條氏が滅びて建武中興となり、又政權が足利氏に移るに及んでは、尊氏が逆を以て天下を取つたから、一般の武士もこれに見習ひ、風儀はいやが上に廢れた。そこで當時の落書にも「四夷を鎮めし鎌倉の、右大將家の掟より、たゞ品のありし武士も皆なめんたらにぞ今はなる。」といふことが書いてある。右大將家といふのは頼朝の事で、頼

文教

朝が掟を立ててから、鎌倉の武士は皆品格があつたのであるが、今はそれがめちやく／＼になつたといふ意であらう。更に足利時代に至つては、引續いて風儀が良くなかつた。それを信長や秀吉が引締めて行き、ついで家康が出て文教を勧め、人道を辨へさせたので、武士道が又々盛に起つた。やがて武士ばかりではない、町人の中にも俠客などといふものが出て、一種の俠氣を養成したから、いはゆる大和魂は、武人以外、市井の間にも行はれ、彼の軍談、辻講釋等にて讀上げるところも、忠勇な武士の美談や、勇ましい俠客の事蹟等であつて、冥々の裡に婦女や子供までにも、武士道を教へ來つたのである。

大日本全史

市井の間

冥々の裡

一四 桶狹間の戦 その一 遠山信春

(一)尾張國四春日井郡清洲町  
(二)同愛知郡  
(三)林通勝

織田上總介信長公、清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海(二)に出向かひて無二に今川と一戦を遂ぐべし。と仰せらる。林佐渡守等、敵は四萬に及ぶ大軍なり。身方三千の御人數にて、平場の御合戦、對揚すべきことにあらず。たゞこの城に立籠らせ給ひて、敵を切所に引請けて戦はせられよ。と諫め申し上げけれども、この儀少しも御承引なし。  
さるほどに五月十八日の夜に入りて、敵は大高(五)に參着の由、丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申し上げけり。信長公御家老を集められしに、軍の評定はこれなくして、たゞ世

(四)永祿三年  
(五)知多郡桶狹間の西北一里半  
(六)知多郡  
(七)佐久間盛重

猿樂

上の御雜談にて御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅生門の曲舞くまをなし、兵つばものの交頼ある中の酒宴かな。と謠ひければ、殊の外御感ありて、黄金を下され、すでに夜も深更に及べり、各宿所に歸りて支度あるべし。とて出されけり。家老の面々互に顔を見合はせつゝ、口々に、日ごろは良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん。さしたる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。と言合ひて歸りけり。

智慧の鏡も曇る

笑止

(一)知多郡鷺津町。注進

かくてその夜の明くるを待たせ給ひけるが、夜すでに明方の事なるに、鷺津(一)の城より注進あり、敵たゞ今鷺津、丸根両城へ人數を取掛け候。と追々申し來る。信長少しも騒ぎ給はず、敦盛の舞の「人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如く

なり。一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか。」といふ所を繰返し舞はせ給ひて、されば螺貝を吹立て、具足をおこせよ。と仰

物具



織織る。靜かに御物具を召固め、立ちなが  
田田ら御食を三杯まゐり、御冑の緒をし  
信信められ、太く逞しき栗毛の駒に召さ  
長長れつゝ、閑々と御出場なり。御供の小

(一)今名古屋市内。

姓衆、御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等主従六騎、その外雜兵二百餘人、熱田(一)まで三里の間を一時に駈附けられ、熱田大明神の旗屋口に着かせ給へば、諸勢方々より馳參じて、はや千騎になりぬ。當

擁護

(一)熱田神宮の門前約半町。俗に智慧の文殊といふ。

社大明神へ御參詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。とて、諸勢を勵まし進まれけり。

(二)愛知郡呼續の南。  
勢揃  
採みに採む

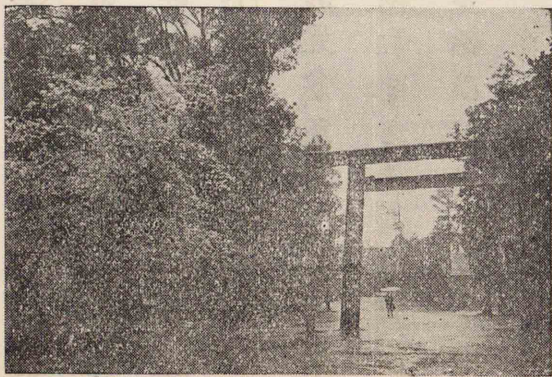
源大夫の宮の前より東を御覽するに、丸根山、鷺津山両城ともに落城と見え、黒烟雲に連りて夥しければ、少しも早く馳附けたく思し召す。濱手よりは近道なるに、それさへけさは満潮差入りて、馬の通ひもかなひ難し。その日の辰の刻に、漸々熱田より笠寺(一)の東上道の細繩手を、採みに採みて駈けさせられ、道々の砦の人数を召集め、やがて善照寺の東の狭間にて勢揃ありけるに、漸く三千許なりけれども、五千の人

披露

(一)知多郡有松町に屬する。勝たぬを、決したる。田樂狭間である。

數とぞ披露ありける。

さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道に遣過して、當方の人数はひそかに山の陰に廻り行き、義元の本陣へ一度にどつと突掛り、切崩さんとの結構なり。義元これをば知らず、桶狭間(一)の山下の芝原に敷皮しかせ、先手の者どもが鷺津丸根の両城を攻落せしを大いに悦び、勇み誇りけるところへ、近郷の寺社の僧、社人等、悦の樽を進上しければ、即ちそれにて酒宴を始め、謠をうたひ興に入る。



熱田神宮

興に入る

(一) 佐々政次、政の兄、成  
(二) 千秋秀忠

熱田表には織田方の先陣<sup>(一)</sup>佐々隼人、千秋四郎等人數二百許にて、信長公の御旗を待受け、山際に控へるたる駿河勢へ打つて掛る。佐々、千秋小勢なれば取圍まれて、五十餘人討取られ、駿河勢誇りて、隼人、四郎兩將の首を取りて槍の先に差上げて、一度にどつと鬨を作る。しかのみならず、信長公の寵臣岩室長門守も拔駟して討取られぬ。佐々、千秋、岩室三人の首を本陣に遣はし、義元に見せ奉れば、義元愈勇み誇りて、某が鋒先には、いかなる天魔波旬なりともたまるまじ」と宣ひて、なほ勝軍に驕を極め、酒宴に耽りてゐる給ひけり。

一五 桶狭間の戦 その二

天魔波旬

(一) 桶狭間の西北  
(二) 池田信輝、輝  
政の父  
(三) 毛利秀高  
(四) 柴田勝家  
一騎打

勿體なし

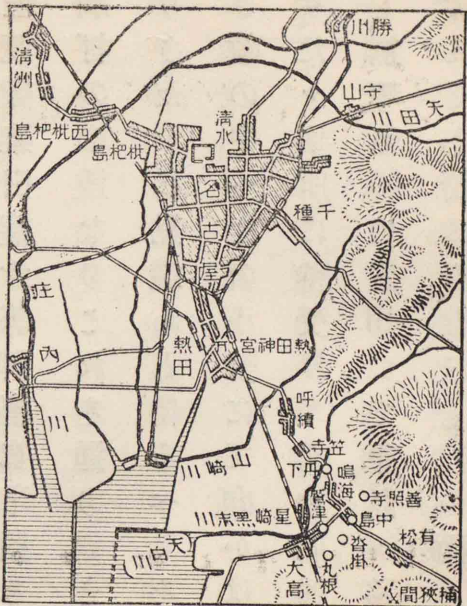
無理無體

さて、信長公は「これより中島へ移りて合戦を始めん」と宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田權六等御轡に取附きて、「ここは両方深田の中、一騎打の細道なり。これを通り過ぎ給はば、無勢の様體敵方よりさだかに見透かし侍るべし。その上勝をあせりて、威勢強き敵の中へこの小勢にて向かはれんこと、勿體なき次第なり。たゞ切所に待受けて御合戦候べし」と各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島へ移らせ給ひ、中島より又討出でんとし給ふを、なほも彼の面々聲々に止め申しけり。その時信長公人々を顧て、凡そ合戦の習は、勢の多少によるべからず。殊更この敵はきのふは大高城へ兵糧を入れ、又

新手

思ひ切る

けさは鷺津丸根両城の合戦に精を盡し、辛苦艱難して、疲れはてたる人數なれば、大勢といふとも猛からず。此方は新手



安堵

さて、けふの合戦は、首取るべからず、打捨なるべし。この軍場へ出づる者は、家の面目、末代の高名たるべし。とて、諸勢を

にて思ひ切りたる軍兵なり。敵の思ひもよらぬところへ、無二に掛つて突崩さば、などか勝利を得ざるべき。と大音聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

(一)前田利家

いさめて掛り給ふに、先驅の前田犬千代生年十八歳、毛利河内、森十助、木下雅樂助、中河金右衛門、佐久間彌太郎、森小助、安倉彌太郎、魚住隼人等高名して、手に手に首を持來る。信長公御感ありて、皆々旗を巻き、忍びやかに山際まで押附け、敵勢の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ。と下知し給ふ。築田出羽守申し上ぐるは、敵の後陣は先陣たるべし。たゞ今この口より突掛り差向かはせ給ふならば、必ず大將義元を討取るべし。と申しければ、さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

(二)築田政綱

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く敵の顔へ風吹きかく。敵の爲には向風、身方は後より吹く風なり。餘りに強



(一)愛知郡

き風雨にて、沓掛の山の上に生ひたる二がい三がいの松の木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これたゞ事にあらず、熱田大明神の神軍か神風かなんといふほどなれば、身方の大勢廻り來る物音少しも敵に聞えず。やがて雨の霽間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、掛れく。と大音あげて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、身方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。ただこのまゝ馬を入れて、乗崩し給へ。といふを、尤もなり。とて、毛利新助、織田造酒丞、築田出羽守、中條小市郎、遠山甚太郎、河内守等、大將に打續いて一度に馬をどつと入れ、その勢勇みに勇んで、黒煙を立てて馳破れば、敵陣思ひも寄らぬとこ

(二)森可成、關丸の父

裏切

算を亂す

ろへ俄にかゝられ、心ならず後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒いで、喧嘩か。といふ者もあり。謀叛か。裏切か。と思ふもあり。取捨てたる弓、鐵砲、旗指物は算を亂すに異ならず。中にも義元の乗給ひし塗輿を捨置きたり。信長公これを御覽じ、敵の旗本疑なし。愈追詰めよ。とて、同未の刻、東へ向いて追掛け給ふ。

初は敵三百ばかり義元を圍んで退きけるを、手しげく追附けらるゝにより、二三度四五度取つて返し討死して、次第次第にまばらになり、後には漸々五十騎許取つて返して戦ふところを、信長を初として、皆々馬より下立ちて、荒武者互に先を争ひ、しのぎを削り、鐔を破りて、切先より火焰を出し、

しのぎを削り鐔を破る

(一)服部忠次

した、かな  
る者  
なじかはた  
まるべき

散々に戦ひけるほどに、手負死人は數を知らず。今川義元は無双の勇者にて、なほこれまでも騒がず、諸勢を下知し居給ふところを、織田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義元太刀を抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻居に切附けられて、起上ることかなひ難し。毛利新助來りて、透間なく切つて掛り、義元の首を取らんとす。義元組伏せられて、はや刀にて切ることかなひ給はず。新助が人差指にかつばと嚼付き、終にその指を食切り給ふ。新助元よりしたたかなる者なりければ、指を食切られながら、押附け、義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。  
残る敵もなじかは少しもたまるべき、總軍一度に敗北

して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる身方をも、敵の追ふよと見損じて逃散るところを、ここに押詰め、かしこに追詰め、思ふまゝに攻附けけり。抑、この桶狭間といふ所は、山のはざま深田の邊にて、高み卑み打茂り、足場いづれも切所なれば、逃行く者ども一人に途方を失ひ、悉く討取られぬ。身方の若者ども追付き追付き、首二つ三つ、討取り、御前へ参りけるを、餘の首は清洲にて御實驗あるべしとて、義元の首ばかりを御一覽成され、御馬の先にその首を持たせ、勝鬨を作つて、その日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり。首帳を記されけるに、二千五百とぞ聞えける。これよりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。

——總見記——

はた、神

一六 きらめく稻妻

中邨 秋香

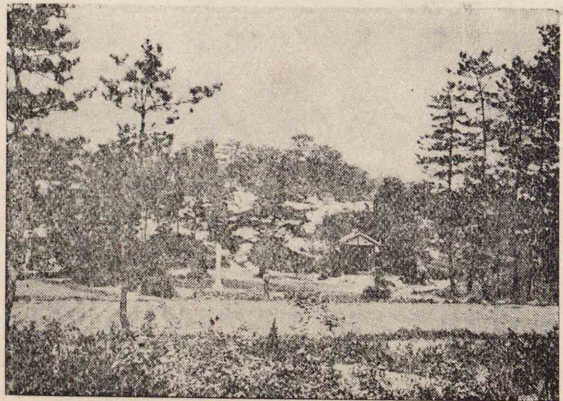
天地に轟くはた、神、  
篠を束ねて降る雨を、  
神の祐と岨まづたひ、  
銜を包み、草摺ままきて、  
攻入る必死の三千騎、

沓掛、大高、笠寺の  
野にも山にも充ち満ちたる  
四萬五千の駿河の軍勢、  
あすは清洲を攻落し、  
決河破竹の勢にて

決河破竹の勢

尾張の國を定めんと、  
心おごりの酒うたげ、

「松の嵐は琴のしらべ、  
鳴神のおとは鼓のひびき、  
よに心地よきうたげや。」と、  
佩きつる太刀の緒打解けて、  
歌ひつ舞ひつ、もろともに  
興たけなはなる折しもあれ、  
四面に起る鬨の聲、  
すは敵ぞといはせもあへず、  
雨よりしげき寄手の槍先、



桶狭間戦場址

嵐をしまく敵の太刀風。  
 天たちまち覆り、地みる／＼裂け、  
 きらめく稻妻光のひまに、  
 二千餘人の玉の緒は、  
 草葉の露と消えにけり。

あゝ、定めなき人の世や。  
 あゝ、頼まれぬ人の身や。  
 さもいかめしく轟きし  
 名はときの間のはたゝ神。  
 夢の名残の松風も、  
 昔のあとやたづぬらん、  
 五月雨寒き桶狭間。

一七 太閤と曾呂利

湯 淺 元 禎

(一)和泉國堺。

堺(一)の鞆師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、そのものの答ふるやう、「臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申候。太閤はて奇なる姓もあるものかな。してその曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもあるか。」と問はせけるに、又答ふるやう、「聊かいはれもこれあり候。別にあらず、臣のこしらへたる鞆は堅くして曾呂利と入り、敢へてつかへず。ここを以て曾呂利と申候。太閤「これは奇なり。又折節せきせつ來るべし。」といはる。

他日又太閤に謁しけるに、太閤問うていはく、「汝の姓名は

何と申せしな。答へていはく、曾呂利々々々、新左衛門新左衛門。太閤怪しみてその重言かさねごとを尋ねけるに、新左衛門の答ふるやう、殿下先に臣の姓名を問ひ、今復重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候なり。」と。

太 閣 新左衛門或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の匂を嗅がせられ

たし。」とありければ、太閤訝しく思ひ、「こやつ又何をかなすらん。」と疑ひしが、何はともあれ宜し、汝がよきに嗅げ。」と許され



讒言

呆然

しかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて、何やらいふ體なれば、皆々心中密に驚き、「かやつ何をいふらんか。若しや我を讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛するところなれば、かやつがいふこと御用ひあらんも測られず。」と憂へ、おの／＼自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調べて、密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で謝していへるやう、殿下のお耳を拜借し、その香ばしき匂を嗅ぎたる功德によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下の御耳の効能なり。」とありければ、太閤も亦呆然として愕きけるとなん。

又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその功ありしかば、太閤「何なりと汝の望めるものを賜はせん。」とありけるに、新左衛門のいへるやう、臣敢へて大なる望もこれなく候。たゞ紙袋二箇ほど米を賜はりたし。太閤「そはいと易き事なり。餘り慾ずくなの至ならずや。」と仰せありけるに、新左衛門「これにて澤山なり。」と申して退出せしが、やがて二箇の紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來り、太閤の御前に出で、「前日御約束の米これに賜はりたし。」と、米倉二戸前を蓋ひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、暫し言句もなかりけり。

又或時太閤數多金銀の蟹を造らせ、これを庭の泉水に放

ちて娛樂としけるが、程經て見飽きたりとして、近習のものに、何ぞ一用をいひ出づるものにこれを與へんと申されけるに、皆々大いに悦び、臣はこれを紙押けせんになさんといひ、或は臣は金の茶釜の蓋も持たねば、せめてこれをその蓋の把手つぎみになさんといひ、何といひ、彼といひて一箇つつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、臣は人の相撲もすでに見飽きしことなれば、この蟹を集へて相撲を致さんと存ずるなり。」といひければ、太閤相撲とありては、五箇や十箇にては興薄かるべし。悉く持行くべし。」とて、残れる蟹を皆與へられけり。その頓才實に驚くべく、奇とすべし。

一八 二挺の鎌

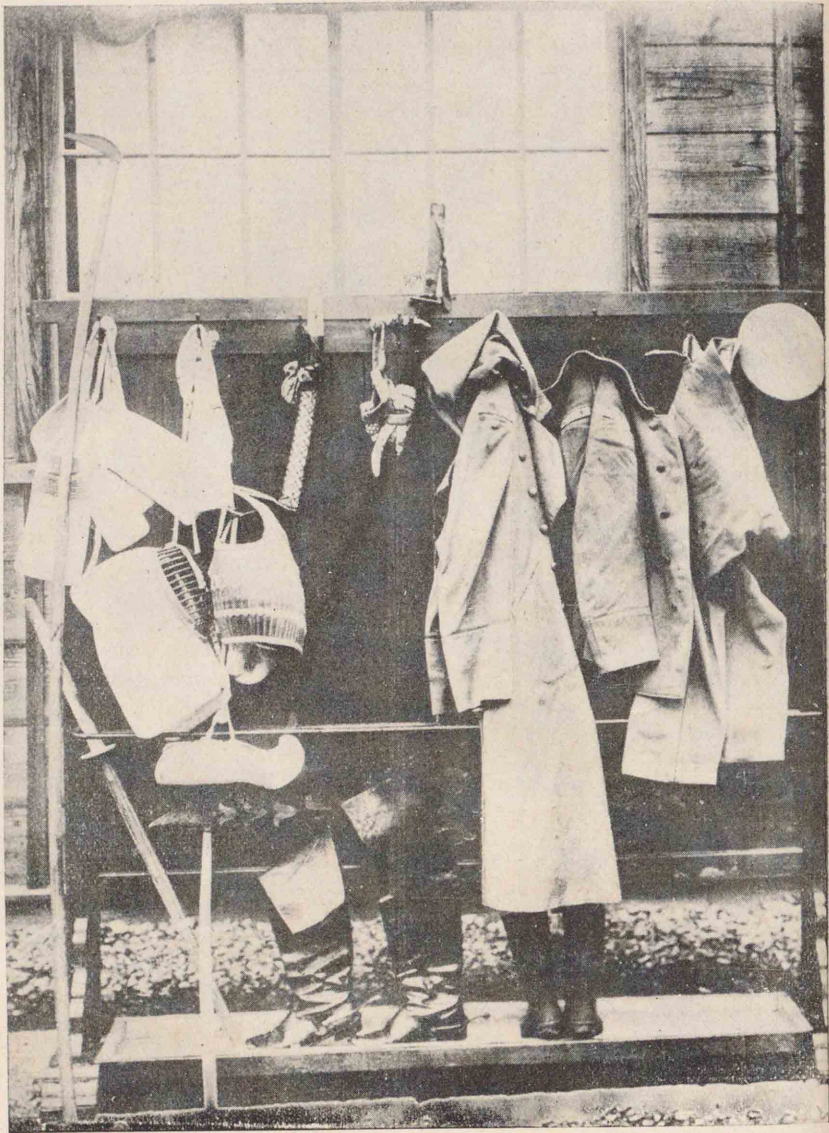
鳥野幸次

すげる

心から  
乃木希典、陸  
軍大將、大正  
元年九月十三  
日明治天皇に  
殉死した、三  
十六年

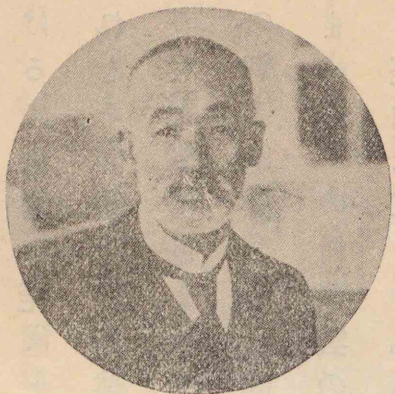
學習院の總寮部に二挺の鎌あり。短きは三尺、長きは一間ばかりもあらん。ともに鐵の刃に櫛の柄をすげたり。身の減り、柄の黒みたるは、年久しく使ひ慣されたりと思しく、近く手に取るに、土の香草の匂さへさながら残るやうなるは、見る人の心からなるべし。これぞこの一室に起臥せられし乃木大將の形見にして、今もなほ儼然として大將が在りし世の面影を語るなり。

寄宿寮にての起床時限は五時半なれども、大將は毎朝定まりて四時半には起出で、朝食までの二時間餘を、或は讀書



學習院長時代に於ける乃木大將の遺物

三軍を叱咤す



院長室に於ける乃木大將

に、或は逍遙に過されしが、夏草繁き頃ともなれば、いつも半長靴を穿ち、この鎌携へて、露深き叢に雑草を刈るを一行事

とはせられけり。さるからに、我等の洗面などに立出づる折節、ふとその御姿を見出でては、そゞろに満洲の野に、旅順の塞に、三軍を叱咤せられし當時の<sup>おもひ</sup>倂を回想して、一種の靈氣に打たるゝが常なりき。

明治四十二年五月の初めつ方、我が家に病人ありて、朝疾く寮より家に往復せしことあり。折しも大將は二挺の鎌もて寮側の草を刈り居られたれば、いかにかすべきと余はし



ばし心にたゆたひしが、たゞに過ぎんもさすがにて、近づき  
會釋しつ、御手傳をといへば、一挺の鎌を貸されたり。乃ち相  
並びて刈り居るほどに、他の職員も洗面に來掛りて會釋し  
けるに、大將は莞爾として、通り掛りの職人を雇へり。といは  
れしその態度の自然にして温雅なる、我、人ともに覺えずこ  
の大人格に包まれて、聲に出でてでも打笑ひき。我がかゝる折  
の御手助はこの一回なりしかども、その印象は深く心に刻  
まれて、その日の雲の色、風の音までも、今に忘るゝことなし。  
院内に二つの池あり。ここには人の贈れる鯉を自ら持行  
きて放たれしことあり。水鳥遊び蓮葦生ひて、四季の眺の面  
白ければ、大將も常に行きては心を慰められけるが、この長

き鎌は、ここに浮藻を刈り、流葦を引取らるゝ方の用なりし  
なり。或大雨の朝まだほの暗きに、大將のこの鎌もて獨語し  
つゝ、林間より出で來らるゝに、或職員の出であひて、何事な  
らんと怪しみ問へば、昨夜の大雨に樋の口切れて鯉の逃げ  
もやせると、見に行かれての歸途なりきとか。こはこれこの  
頃聞得し話なり。

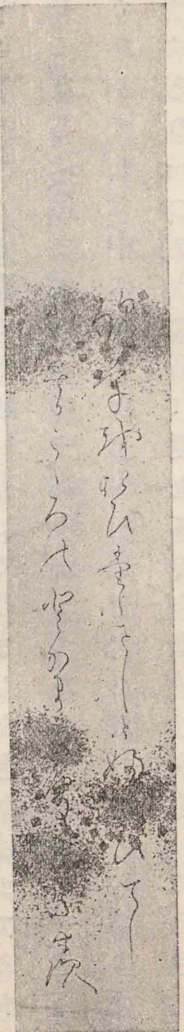
又大將は姫紫苑をいたく悪み、こは刈るにもえ飽かて、大  
方は根より抜きては取棄てられけり。去年の五月晴に、余は  
同僚と碁を圍まんとて娛樂室の方へ赴きしが、恰も大將の  
こを両手に束ねて持來らるゝに會ひ、心耻づかしく感ぜし  
ことあり。この草は一名を荒地野菊といひ、いかなる荒地に

も生ふるとともに、いかなる沃土をも荒地にするが上に、一種の臭氣さへありて馬も食はねば、牧童も刈残すといふ世に忌まはしき草なりけり。その元は我が國にはなかりしを、いつれのほどよりか舶來して、今は全國に傳播し、その猛惡の性を恣にすとか。大將の惡まれしも故ありと謂ふべし。嗚呼、今や大將は去りて、鎌のみ空しく残り、これより後の雜草と荒地野菊とは益、その威を振ふことなきか。我等は力めて大將の志を繼がんと欲す。かの地に生ふる雜草と荒地野菊とはさてもありぬべし。人中の雜草と荒地野菊とは遂に恕すべからず。これ大將が日夕最も憂慮せられしところにして、又我等が一層の銳刃を振はざるべからざるところに非ずや。大將が自らなる趣味とも見えし無意の行動が、今日圖らずかゝる教訓を齎せるも、その人格に因せる自然の暗示としもいふべきか。

—彩雲—

醜草をおひ  
たせしと  
ふかひと  
きみかこ  
ろのかま  
をそかも  
幸次

(一)作家 本名健  
作 未明はそ  
の 田市の  
大學出身  
早稲田高  
田市の人



筆次幸野鳥

少年の頃 (自修文)

小川 未明

町のはづれに病院がありました。病院の石垣は長く幾十間となく續いてゐました。私と同じ年頃の子供には、その石垣が高く見え、ました。一番上の方にある石は、いつも傲然として、私たちの通るのを見下してゐました。そして、ちやうど私たちの頭とすれくにな

る同じ高さの石が、毎日顔を合はすので、最も親しかつたのです。

學校へ往來する時分には、右の肩から鞆かぶとを下げ、左の肩からは辨當を下げて、この石垣の下を通りました。私は殆ど毎日のやうに、石垣のこちらのはづれからあちらのはづれまで、石敷を算へて歩いたものです。それ等の石は、みんな天然に山から掘出された圓石を使つてゐましたから、どれ一つといつて、同じ形の石はありませんでした。それ／＼違つた顔付をしてゐました。形が違つてゐたばかりでなしに、色まで白いのや、赤みが／＼つたのや、黒いのや、さまざまでありました。中にはきら／＼と光を含んだ石などもありました。私はその一つ／＼の石に對して、特別な感じを抱いてゐました。さまざまに違つた顔の人間を見る時と同じやうに、石は決して同じ感じをば私に與へなかつたのであります。

尖つた石は瘦せた老人のやうにも思はれ、又圓い石は肥つた人のやうにも思はれました。肥つた人にも亦色々その人の顔付や様子によつて、愛憎の感じが異なるやうに、圓い石もその恰好によつて、私には好き嫌ひがありました。

かうして毎日往來ゆきまのたびに同じ石を見ますと、随分澤山な幾百とある石のなかでも、いつ見ても氣持の好いなつかしい石といふやうなもの、眞に僅かしかありませんでした。

一つ、二つ、三つといつて、私は例の如く、片端の方から算へながら行きますと、その圓い、人間でいつたら人の好いお爺さんといつたやうな石に出遇ひました。すると石は又私の顔を見て笑ひました。「けふは少し遅い。學校の鐘が鳴つた時分だ。」と、その石はいふのでした。私は始めて氣が付いたやうに驚いて、頭を上げて、道の上を見廻しました。一方は青々とした畠になつてゐます。あたりはしんとして、他に道を行く生徒の影も見えなかつたのです。それで慌あわてて大急ぎで、次から次へと三十、三十一、三十二と石を算へながら、驅出すやうにして行きました。それでも私はなほ石を算へることをや

胡蝶花  
草はつ科の  
四月頃  
白い花をつけ  
る。莖の長さ  
一二月。

めなかつたのです。  
子供の時分には、どうしてかう自然が物悲しく、又なつかしく見えたでせう。夏の日などは、この道の上に陽炎が立つて、霞んでゐました。そして石垣の上には、胡蝶花が首を垂れて、その下を通る人々を眺めてゐるやうに美しく咲いてゐました。私はぼんやりとその花を見上げて、その厚みのある幅廣の濃綠色の葉の上に、星のやうに照映える太陽の光に見入つて、自分を忘れて、遠いはかない空想に囚へられたことがあつたのです。

この石垣を出はづれると、又青々とした田圃になりました。道は二つに分れて、一つを行けば學校や製紙工場の方へ出るし、一つを行けばやがて橋の上に出ました。橋は寂しい田舎へ通ふ路にかゝつた小さな橋でした。大水が出ると、いつも流れはしないかと氣遣はれたほど、もう古びてゐました。下には水がいつばい岸に溢れて流れてゐる。兩岸には草が茂つてゐる。そしてところ／＼樹があつて、その影を水の面に落してゐました。

友だちもなく私はたゞ一人でこの川の邊に來て、木の下で釣をしたことがあつたのです。草の上に渡る風を見た時、私は思ひ出せない世界の記憶をそゝられるやうな氣持がして、悲みに瞼の重く垂れるのを覺えました。

立上つて、脊伸をして彼方を見ます。國境の高い山々が遠く齒の並んだやうに、晴れた空の下に頭をもたげてゐました。私にはその山は人間の行ける所ではないやうな氣がしました。寫生帖を懐から出して、その山の姿をゑがいてゐたこともありません。或時は日がかげつて、水の上に浮いてゐる赤いうきが黒くなるまで、その川の邊にゐたこともあります。そしてもはや薄暗くなつた石垣の下を歩いて、家の方へ歸つて行つたこともあります。少年の日を思ひ出す時、この石垣は一番なつかしいものとなつて、私の眼の前に現れます。

— 雨を呼ぶ樹 —

そゝられる  
思ひ出させら  
れる。

〔支那晋代の學者〕

佳境

### 一九 漸進主義

八波 則吉

昔願愷<sup>(一)</sup>之といふ人は、甘蔗を食ふことに、常に尾から本に至るのでした。或人がその理由を問ふと、愷之は「漸く佳境に入る。」と答へたと晋書に見えてゐます。私のここにいふ漸進主義とは、即ちこの漸入佳境主義のことです。

「漸」の一字、これ私が平素最も愛する文字です。や、や、や、や、「やうく」、「やうやく」などと訓じまして、次第々々の義です。急の反対です。一步一步の意味です。一足飛ではなくて、一足づゝの意味です。漸進、漸進。これ私が平素最も愛する主義です。

訓ず

自彊息<sup>ミ</sup>ミ

天行健

戊申詔書の中に、「自彊息マサルヘシ」とあります。それは周易の「天行健、君子以自彊不息」と同義だと承つてゐます。即ち日月星辰の運行は、幾萬年の往古から幾億歳の未來まで、自彊不息です。しかも一定の速度を以て、一定の軌道を漸進してゐるのです。御覽なさい、太陽は朝に出て夕に没すること、きのふもけふも同様です。千古不易です。試に日向に棒を立てて日影の推移を熟視すると、少しも動いてゐるやうには見えませんが、暫時油断してゐる間に、驚くばかり移つてゐます。東北地方で、農夫が夏時田の畔や草原に寝てゐるが、竿に蓑笠を吊して枕元に立てながら、身はその蔭を離れる尺餘の炎天下に熟睡してゐるのを往々見受けると、或旅行記

分泌す

に記してありましたが、よく天行の健を示すと同時に、君子ではないものの自彊不息實行難を物語つてゐるではありませんか。

南洋にある珊瑚島は、珊瑚蟲と稱する微細な蟲の分泌する石灰質の堆積ださうです。蟻の塔や蜜蜂の蜜などを見るごとに、私は自彊息まない漸進主義の効果の大きいのに驚かないではられません。

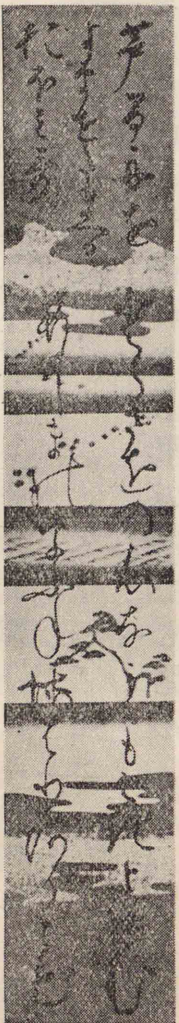
昔愚公が山を移したといふ話が列子に出てゐて、駿臺雜話にも引いてあります。又鐵の杵を磨いて針を造る者を見て學に志した人の話は、よく人口に膾炙してゐます。いづれも根氣よく辛抱すべきことを諭した自彊不息の實例で、取

膾炙す

りも直さず漸進主義の効果を語つてゐるのであります。

明治天皇の御製の中の、

いちはやく進まんよりも怠るな  
まなびの道にたてるわらはへ



昭憲皇太后  
御筆

とる棹の心長くも漕ぎよせん

蘆間の小舟さはりありとも

大空にそびえて見ゆる高嶺にも

のぼればのぼる道はありけり

など、いづれも漸進主義、即ち息まない自彊の偉績を教へ給うたものかと拜察します。古今集の序に、

「遠きところも出立つ足もとより始りて、年月をわたり、高き山も麓の塵ひちより成りて、天雲たなびくまでおひのぼれる如くに……」

とあるのも、古歌に、

怠らず行かば千里のはても見ん

うしの歩のよしおそくとも

とあるのも、またわが漸進主義を説明し鼓吹したものと見れば見れます。

——よくぞ男に——

二〇 海洋の月明

山崎米三郎

紅蓮の焰  
天地溟濛  
豺貅

満天満海、たゞ紅蓮の焰をなせる入日の影もすでに跡なく、天地溟濛の間點々數星を仰ぎ、一千の豺貅一日の苦熱より始めて蘇りたるを覺ゆる時、白き光おぼろに東天に起り、さながら夜の明けそめんとするにも似たり。

白き光は愈光を加へて、やがて燦然たる半圓形の銀塊となりて、波上に現れそめぬ。銀滴忽ち水に落ちて銀波となり、白銀の光は一波より一波に移り、見る見る波上を疾走して、我が艦側に向かつて馳來る。

忽ちにして一面の銀盤は、龍神下よりこれをさげ、天女

白銀の光

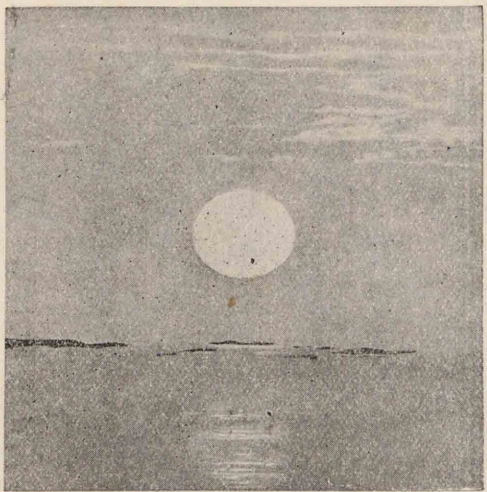
淨々昭々  
百鍊の明鏡

上よりこれを支へて、全く水天の界を離れ、淨々昭々、百鍊の明鏡を開きたる如く、朦朧たる天空に清光忽ち漲りて星辰光を失ひ、煌々たる銀色は千波萬波に湧きて、滿目濶然、涼風更に涼を加へて、爽快極りなし。

水天杳渺

吾人はこの急速なる眼界の變轉に接して、僅々半時の前、夕照の壯觀に驚嘆の聲を放ちたるを顧れば、彼の落日がいち早く水平線の下を西より東に廻りて、それが紅金の衣を白銀の服と更へて、ここに再びその靈容を現し來れるに非ざるかと疑ひ、暫くは自然の壯觀に茫然たらざるを得ざりき。かくて月は晴空を貫いて一尺を上れば、艦は銀波を蹴つて一漕を進み、水天杳渺の間、月と艦と互に活動を競ふが如

清輝千里に  
亘りて銀波  
萬頃に流る



海 洋 の 月

く、形に影の伴なふが如く、浩々たる空中の孤月輪と、漫々たる波上の一浮城とは、絶妙の對照を爲し、吾人をして益、壯大の感に打たれしむ。

初更の頃再び艦上に出づれば、月はすでに高く半天にあり。清輝千里に亘りて銀波萬頃に流れ、皎潔浩蕩の感更に深きを覺ゆ。乃ち身を臥榻に横たへ、萬斛の涼味を掬しつゝ、大空を仰げば、心氣曠然、宇宙の壯觀を獨占したる思あり。仰臥久しくして爽涼骨を洗ひ、夜色沈々、艦上聲なく、立つて艦室に下ら



んとすれば、月の雫か、桂の露か、衣袂の悉く沾ふを見る。

三更の頃三度艦上に出づれば、月色水の如く天心に懸りて、冷涼すでに夏去り秋の至れるかと訝しむ。この時波濤稍高まりて艦體軽く動搖し、艦の中央線に立つて月に對すれば、檣頭は或は月の右に在り、或は左に在り。暫く恍惚として眺むる中、いつしか我が艦の動搖を忘れ、檣頭の左右に動くを見ずして、たゞ月の檣の右に走り左に馳するを見るのみ。玉兔鞦韆に乗りて戯るゝかと恠しまれ、天つ少女が天上のテニスコートに、月球を弄するかと疑はる。

五更の頃四度艦上に出づれば、月すでに傾きて斷雲頻りに去來し、雲は月を停めんとして抱くが如き貌を示し、月は

Tennis court.

去來す

雲より脱せんとして奔るが如き狀を爲す。忽ちに満月皓々、忽ちに天海濛々。或は半海輝きて半海暗く、匆忙變轉の狀、これ洋上月夜の壯觀なり。

—軍艦旗の下にて—

二一 山 寺

若 山 牧 水

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと、何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝手元の方に耳を澄まして、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに啼く鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類のことだらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して見ても、とても數へきれぬほどの種々な音色が、枕の上

落ちて来る。私は耐へきれなくなつて飛起きた。そして雨戸を引きあげた。

照るともなく曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ靜かに押並んで、見渡す限り微な風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐた私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る所を見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでと、その周圍はわからないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに靜かな眺なので、我を忘れてぼんやりとそこらを見廻してゐると、又一つの物が目に入つた。眼前からすぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帯は、ちやうど溪間のやうにな

つて、僅かの間杉木立がとだえて、細長い雜木林になつてゐるが、その藪の中をのそりくと半身を屈めながら、何か探してゐる人があるのである。頭を丸々と剃つた大男の、紛らふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私はうれしくなつて、大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。後庭に降りて、笥の前で顔を洗つてゐると、爺さんは青々とした野生の獨活を提げて歸つて來た。こんなものも、といひながら、笥をも二三本取出して見せた。

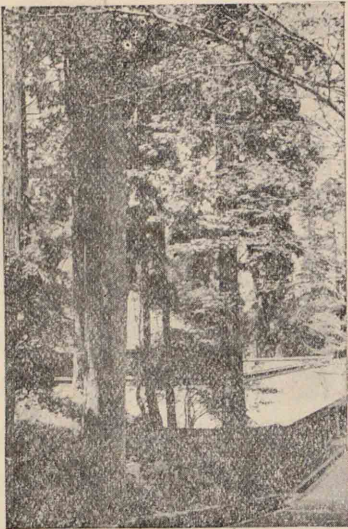
この寺は、比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺の中、最も奥に在つて、又最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時の外、めつたには

(一)延曆寺の本堂  
 大師の創建  
 (二)傳教大師の廟  
 (三)比叡山の最高  
 峰二七三尺  
 (四)山城國愛宕郡  
 八瀬村の東

(五)最澄のこと  
 近江滋賀の人  
 延曆十二年勅  
 命を奉じて唐に  
 歸朝し二十一年  
 仁徳天皇(一)弘  
 仁六年(一)一  
 年五十六歳

登つて來ず、年中殆ど、この寺、男の爺さんが一人で留守居を  
 してゐるのである。四方たゞ杉の林があるのみで、しかも溪  
 間の行きどまりになつた所に在るので、<sup>(一)</sup>根本中堂だの、淨土  
 院だの、釋迦堂だの、又は四明嶽、<sup>(二)</sup>元黒谷などへ往來する參詣  
 人たちも殆ど立寄ることなく、まる一週間滞在してゐる間、  
 私はこの金聳の爺さんの外、人間の顔といふものを見るこ  
 となくして、過してしまつた。  
 多いのはたゞ鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大  
 師の一千一十年忌に當つたといふ舊い山、そして五里四方  
 に亘ると稱へられる廣い森林、その到る所が殆ど鳥の聲で  
 満ちてゐる。

朝最も早く啼くのが郭公である。くわつくわう。くわつく  
 わう。と啼く。鋭くして澄み、しかもその間に何ともいひ難い  
 さびを持つたこの聲が、山や溪の冷たい肌を刺すやうにし  
 て響き渡るのは、大抵午前  
 四時前後である。この鳥の啼  
 く時、山は全く鳴りを静めて  
 ある。くわつ。と鋭く高く、さう  
 して直ちにくわう。と引くそ  
 の聲が、ほゞ二つか三つ、或場所  
 で續けざまに起つたかと思  
 ふと、もうその次は、違つた或頂上か、溪の深みに移つてゐる。  
 暫くも同じ所に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見



根本中堂

せたことがない。

杜鵑も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して啼きたてることがある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて来る。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛渡る時の姿が誠に好い。それから、高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺くらゐ長いのがゐて、細々と、實に細々と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねて

ゐるのを見る。

寄邊ない

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、どこから起つて来るのだから、大きな筒から限りもなく抜けだして来るやうな聲で啼きたてる鳥がゐる。始もなく、終もない。聽いてゐれば、次第に魂を吸取られて行くやうに、寄邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶つるべ打ちに烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一目見たいものと、幾度も私は木の雫に濡れながら、林深く分入つたが、終に見ることが出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて圖抜けた間の抜けたものであるが、それを稍小さく、且人間くさくしたものに呼

子鳥といふのがゐる。初め筒鳥の子鳥が啼いてゐるのかとも思つたが、よく聞けば、全く異なつてゐる。山鳩にも似、又梟にも近いが、そのいつれとも違つた、やはり呼子鳥としての、いひ難いさびを帯びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、そここの溪から峰にかけて啼きたてる。茫然と佇んで耳を澄ます私は、身體全體の痛みだすやうな感覺に襲はれることが再々あつた。

—比叡と熊野

和字期

### 二二 富士の大觀

大町 桂月

旅順にて黄金山を攀ちし時の事なり。旅順要港部の司令

(一)名は佛次郎  
話柄

(二)Veavio.  
(Vesuvius)  
路伴

官黒井海軍中將我を導く。將軍善く談ず。話柄西歐の天に飛ぶ<sup>(一)</sup>イタリーにてベスビオ山に登りし時、一獨人路伴となる。突然「君は幾度富士山に登りしか。」と問ふに、「一度登らぬもばか。二度登るもばか。」と答ふれば、「富士山の如き立派なる山は、世界に二つとなし。余は四回登れり。日本に生まれながら、ただ一度しか登らぬとは、さてく、勿體なきことなり。」と笑はれたり。とて笑ひぬ。余も知らず識らず笑ひぬ。

(三)Hercules.  
(四)越後國。  
(五)いづれも  
信濃國。  
(六)相模國。  
(七)伊豆國。

高さをいはばニューギニアのヘルキュールス山の如きは、三萬二千七百八十呎、幾ど我が富士山に三倍す。されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀靈を極むること、世界中富士に比すべきものなし。妙高<sup>(四)</sup>、戸隠<sup>(五)</sup>、立科<sup>(六)</sup>、八ヶ嶽<sup>(七)</sup>、箱根<sup>(八)</sup>、天城<sup>(九)</sup>など

盟主

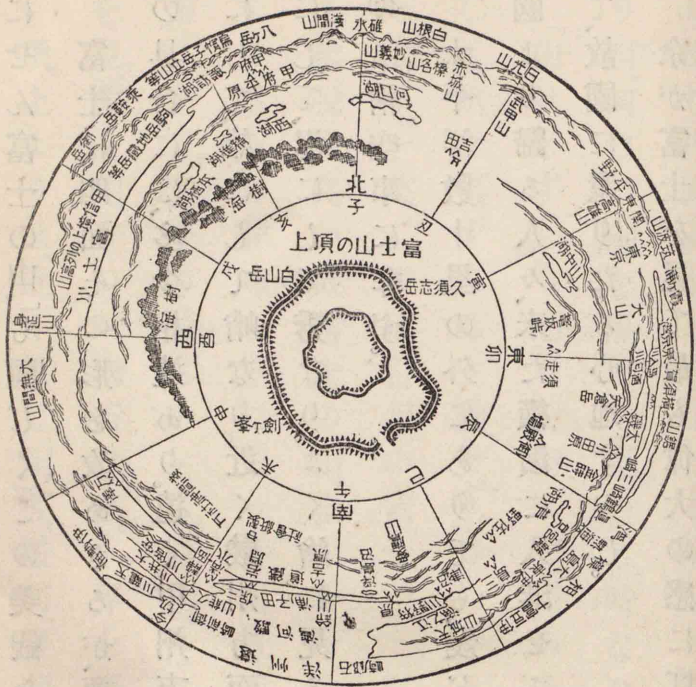
いはゆる富士火山帯の盟主なるとともに、日本山嶽の盟主にして、ほゞ日本の中央部に位せるが、山又山の奥に隠れず、東海に接して、周圍に裾野を控へ、四面その形を改めず、近くこれを一周するを得べく、展望二十一國の多きに達す。十三州一目とは相模、武藏、安房、上總、下總、上野、下野、常陸の關八州の外に、伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃を加へたるものなるべきが、なほ越後の妙高山、越中の立山、美濃の惠那山、伊勢の朝熊山、尾張の小富士、三河の石卷山、信濃、飛驒に跨がれる御嶽、常陸、磐城に跨がれる八溝山より富士を望むを得べければ、富士より二十一國を見下し、二十一國より富士を仰ぐなり。日本中の佳景といへば、富士の見ゆる所なり。他の條件は具備せ

りとも、富士見えざれば、何となく物足らぬ心地せらる。

富士山は夏を除きては、雪を被りて、白玲瓏たり。夏とても、山上には雪の消えざる所あり。雪は一層富士を美にし、兼ねて神聖にす。山部赤人の「田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、富士の高嶺に雪は降りける。」

(一)歌人の  
天平中

玲瓏



(一) 連歌師。天文二  
宗鑑。天文二  
一十二年。二  
八十九年。二  
九。歿。年

繪空事

も同じくこの美觀を捉へたるなり。宗鑑の「元朝の見るもの  
にせん富士の山」も、同じくこの美觀を捉へたるなり。  
富士は四面その形を改めざるが、頂上の峰の具合や傾斜  
の具合には、多少相違あり。遠く甲州方面より仰げば、傾斜急  
にして、雄にして峭なり。近く駿州方面より仰げば、傾斜稍緩  
にして、温にして秀なり。よく繪に見る三峰分立の頂は、いは  
ゆる繪空事に非ず。  
太平洋數十里の外にありても、幾ど富士の全幅を望む。外  
國より歸る人々、未だ横濱に入港せざるも、まづ富士を仰ぎ  
て、故國に還りたる心地すべし。  
余が富士を見て最も偉大の感に打たれしは、遠くにては、

(一) 甲斐國

(二) 實語教の句。  
(三) 頼山陽耶馬溪  
圖卷記の句

超脱す

(四) 徳川時代の歌  
人。桂園と號  
する。天保十  
四年(二五〇十  
三年)歿。年七  
十六

大島の三原山上より見たる時なり。近くにては、十二ヶ嶽よ  
り西、河口二湖を隔てて見たる時なり。  
「山は必ずしも高きを尙ばず、樹あるを尙ぶ」といひ、又「山に  
して水を得ずんば生動せず」といへるが、これ普通の山のこ  
となり。一萬二千五百尺の富士山となれば、樹に超脱し、水に  
も超脱す。高い哉富士の山、全山を十合に分つ。麓の一合がす  
でに附近の群峰の上にある。香川景樹の「群山の高嶺々々を  
傳ひ來て、富士の麓にかゝる白雲。はげに實況なり。脚底に雲  
を見、雷を聞きつゝ、攀行けば、下界を離れて天に登る心地す。  
頂上よりは、近く伊豆、相模、駿河、甲斐、信濃などの山々を見  
下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、遠州灘を見下し、上總

(一)支那唐代の詩人。  
(二)徳川時代初期の國學者、大和の人、貞享三年(一七二六)歿、年六十四。

下總の彼方の太平洋を見下す。太陽の直ちに海より出づるを見る。殊に下界を蔽ひ盡せる雲の海のはてより太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらん。氣澄みて月近し。手を伸ばさば届かんかと思はる。李白が「不敢高声語。恐驚天上人。」の心地も起るべく、下河邊長流の「富士の嶺に上りて見れば天地は、まだいくほどもわかれざりけり。」の心地も起るべし。

普通一般に、日本國民が神聖の感に打たるゝは、二重橋外より皇居を拜する時なるべし。若しくは水清き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前に大神宮を拜するの時なるべし。これを自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐの時なるべし。

(一)水戸の志士、安政二年(一八二五)歿、年五十五。

し。萬世一系の天皇は人にして神におはす。神の知らず日本は神州なり。藤田東湖は神州の正氣を歌ひて、「秀爲富士嶽」といへり。日本に山は多けれども、神州にふさはしき山は、富士の外に求むべからず。東海に特立して白玲瓏たる姿は、げに神州の山なり。神の山なり。本居宣長の「しきしまの大和心を人間はば、朝日に匂ふ山櫻花。」を一轉して、「しきしまの大和心を人間はば、朝日にはゆる富士の白雪。」といひても、日本人に不同意はなかるべし。富士山は秀靈なり。正大なり。清淨なり。凜として氣高き趣あるとともに、温にして親しむべき趣もありて、神州の氣象を代表す。大和魂地に凝つて富士山となるか、富士山人に凝つて大和魂となれるか。世界觀光の客



傾倒す  
默契

(一)足利時代末の  
武將、文明十  
八年(一四一  
十六年)歿、年五  
十五

なほ富士に傾倒す。神州の國民は、何人も富士と默契あるはずなり。

野を行きても、山に入りても、海に浮かびても、富士を見れば何となくゆかしくて、一種の神に接する心地す。太田道灌は「我が庵は松原つゞき海近く、富士の高嶺を軒端にぞ見る。」と歌ひたるが、何はさて置き、富士を窓に入るゝ家こそ、日本人の理想のすまひなれ。煤煙立昇る煙突の間にも、富士だに見ゆれば、工業地も詩の國となる。電車、自動車旁午して、電線空に蜘蛛の巣を張れる市塵の中にも、富士だに見ゆれば、都會も繪の國となる。鳥居の上に富士見えて、祠は愈、靈に、尾花の末に富士見えて、野は益、なつかし。富士の高趣は、古來ゑが

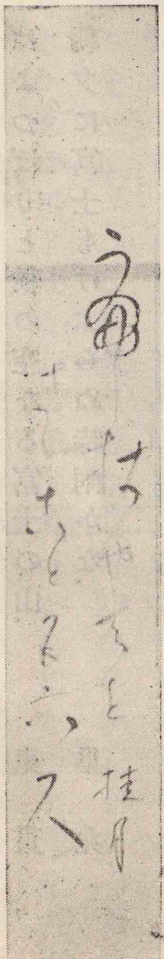
旁午す

市塵

いてゑがく能はず、歌うて歌ふ能はず。富士たゞ黙々として、大空に自然の繪を展へ、詩歌を綴る。

世には眺めてよき山あり。登りてよき山あり。富士や眺めてもよく、登りてもよし。山を見下し、野を見下し、近く五湖を

(一)山中、河口、西  
精選本柄  
いたざりや  
天をさるこ  
と五六尺  
桂月



筆月桂町大

見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を争ひて登り、渴して千秋の雪を掬す。頭上に明月を戴きながら、脚底に雷鳴を聞く。飛鳥はたゞ背を見る。動物も追隨する能はず。天風蓬々として、何處ともなく仙樂を奏す。

—富士行—

四季の富士

四方の春富士も小さく見ゆるなり。  
 富士は雪三里裾野や春の景。  
 富士ひとつ埋みのこして若葉かな。  
 によつぱりと秋の空なる富士の山。  
 朝夕に富士もけぶらぬ時雨かな。

宜 麥  
 宗 因  
 燕 村  
 鬼 貫  
 巢 兆

飛行機がとぶ (自修文)

久米正雄

鎌倉海岸通には山階宮様の別邸がある。傳へ聞くところによると、この「飛行機の宮様」の御別邸があるので、程遠からぬ追濱(二)からの海軍飛行機といふ飛行機は、鎌倉の空を翔過(一)するごとに、宮様に敬意を表する爲、海岸通の中空で一旋回ぐるりと廻つて、そして爆音

(一)山階宮武慶王。  
 (二)横須賀市の北方郊外。

高らかに目ざす方向を取るといふ。さういつたやうなわけで、鎌倉は割に飛行機の訪問に恵まれてゐる。

僕は曾て、飛行機の爆音を決して喧(一)しい、若しくはうるさいと聞いたことがない。そして飛行機を見ることは、昔徳川大尉(二)だつたか誰だつたかが、代々木で始めて飛んだのを見た高等學校生徒時代以來、可なり好きである。それは或は私のやうなもの、身體の奥まで、潜に浸入してゐる軍國思想の遺傳的血が、ゆくりなくも呼(よ)醒(さ)されるのか、或は何とはなしに子供めいた心になつて、空を打仰ぐのが気分を愉快にするのか、爆音の昂揚(かうやう)に連れて、何となく「バンザイ」といつて見たいやうな氣持を、いまだに時々起すのである。

それは毎日鬱陶(うづたう)しい天氣が續いた後、漸く空が薄ぼんやりながら晴上つて、鎌倉の夏がやつて來たと思はせるやうな日だつた。雲は高く、薄く、統(お)のやうに、ところ／＼梳(す)きぎれがしたまゝ、空を包んで、太陽が形を見せないで、在所(ところ)だけを明るく見せてゐた。

(一)名は好敏。今少佐。

統 一種の絹布。おにも繪をかくに用ひる。

徘徊する  
あるさまはる  
うるつきまは  
る。

露臺  
屋根に設けた  
運動場  
バル  
コン  
大儀  
気分がすま  
ない

午前十時頃だった。僕はつい四五日前移つて来たばかりの避暑宿の落着きのない氣分で、ぼんやり柱に背を凭せたまゝ坐つてゐると、遠くから近づいて来る顛へ勝な飛行機の爆音を聞いた。それは益、近づいて来て、どうやら頭上を徘徊してゐるらしい。

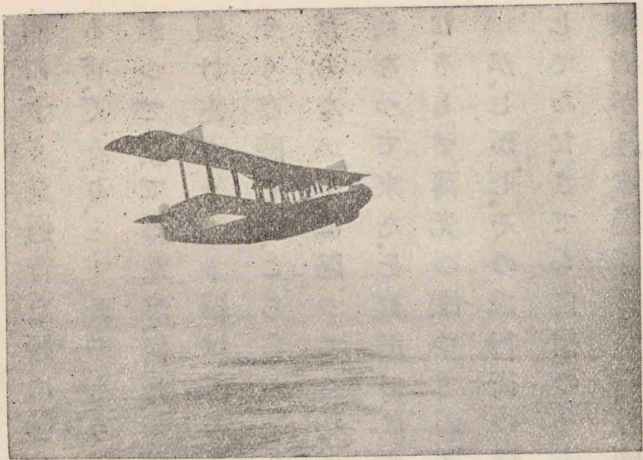
「はゝあ飛行機の奴、又宮様に敬意を表し始めたな。」

すぐ僕はさう思つた。そしてその瞬間、白い海軍服を着た宮様が、何故か白い服が聯想された。御別邸の露臺で、望遠鏡を中空に向けながら、近侍の人々に何か説明してゐられる光景が、フィルムとなつて心に映つた。が、何となく大儀なので、そんな想像でただ心の中に飛行機の旋回をゑがきながら、出ても見ないでゐると、爆音はなかく、遠ざからないで、しかも時々風の加減か、激しくなつたり、突然なくなつたりする。

「變だな。」と思つて、僕は縁側へ出て、宮邸の上空あたりを仰ぎ見た。と、果して、宮邸の眞上あたりに、——事實はさうではなかつたかも知

知れぬが、——一機が鉛色の翼を擴げて、方向を變へつゝあつた。

味をやる  
氣のきいたこ  
となする。



と見る間に、その薄雲の高い空の中で、爆音を一際高く響かせたと思ふと、機はぐいといふやうに横になつて、おや、落ちたなと思ふ間もなく、落着き拂つた態度でだん／＼逆様になりながら、ぐるりと環をゑがき始めた。落ちたんでないなと思つた。すぐ後には、おや、あれが横轉といふのだな。これは面白いぞ。なかく／＼けふの敬意は念入りで、味をやるなと思つたので、瞬もせず見てゐた。

するとその飛行機は續けざまに、ぐるり、ぐるりと三四回見事に横倒しになると、逆轉しては又元へ戻り、又ぐるり、ぐるりと、機翼を

手に汗する  
危く思つてひ  
やひやすする

薄光りさせながら、宙返を續ける。そして少し高度が低くなると、當りまへの姿勢に歸つて、暫く上昇する間は休んでゐるが、見てゐる間に、すぐ又爆音を妙に響かせて、ぐるり、ぐるりを始める。初は又するぜ、ぐるり、……おやもう一度か、ぐるり……といつたやうに、面白がつて見てゐたが、何だかそれを何回となく——無慮十二三回は續けたらう——續けてゐるうちに、何だか妙に胸騒がして、危険なやうな感じて、こちらが苦しくなつて來た、もうよしてくれ。そして落ちない中に歸つてくれ、さう願はずにはゐられないやうな氣持になつて來た。それなのにまだ性懲もなく、その飛行機は薄曇のした、そして薄光の漲つてゐる空で、ぐるり、ぐるりを續けてゐる。が、しかし、その飛行術の鮮さは、我々が素人目には、全く驚嘆に値してゐた。さて自信のある者か、命知らずだ。ひよつとすると、餘り技術がうま過ぎるから、外國の教師か何か知らんなどと思つて、文字通り手に汗して見ずにはゐられなかつた。

危惧  
おやぶみ恐れ  
ること  
まつしぐらに  
いつさんに  
いちちくさん  
に

執拗  
たいへんくつ、か  
たいぢ、か

と、やがて、やうくその機は横轉を止めた。そして私たちのほつとした氣分の中に、すぐ歸るのかと思つてゐると、今度は又環旋をゑがいて、高くく上昇し始めた。は、あ、今度こそもう止めて、高く飛んで歸つて行くつもりだな。さう思つて、なほもその行方を見てゐると、彼は突然、はたと爆音を止めた。そして、おやと思ふ間もなく、機はゆらりと一搖揺れて、機尾を上に乗れ下つたと見る間に、薄光を翼に二三度射させながら、ふらりくくくと落葉のやうに、中空へと錐揉をして下りて來た。そしてそのまゝ、まつすぐに下まで落ちやしまいかといふ危惧の中に、又すうつと今度は横に流れると、そのまゝ、忽ち機の陣を當りまへに立て直して、今度は追濱の方面へ、脇目も振らずまつしぐらに一直線をゑがいて、見るく小さくなつてしまつた。

僕はその機が向ふの逗子寄りの丘の彼方へ黒點となつて没するまで、縁側に伸上りく見送つた。横轉を續けてゐる間は、隨分執

(一)久米正雄の隨筆集、大正十三年東京新潮社發行

(一)英國の詩人ウイルフレンツ!

ギブソン

(Wilfred Gibson)

の詩「氷車」

(The Ice-cart)

によつたもの

① 拗な飛行家だと思つてゐたが、その飛去り振のすうつとしてゐるのが非常に引立つて、何となく愉快だつた。  
——(一) 微苦笑藝術——

二四 (一) 夏の日の夢

西條八十

街なかの役所の腰掛にゐて、  
わたしは涼しげな、しあはせ者の馭者が  
氷を扱ふのを羨ましく眺めてゐた……

忽ちわたしはこの堪へきれぬ巷の  
曇りよごれた炎熱を離れて、遠く  
青玉色の冰山と、緑柱石色の浮氷の上を、  
また、とこしなへの北極の夜の  
しづかな冷たい紅玉の輝の下を、

さまよつてゐた。  
ふしぎなおぼろの光に目くらみ、やがて  
わたしは覺えず一つの灣に踏みこんだ。  
そこには巨きな白熊たちが、  
後足をふり立てて眞逆さまに跳り入り、  
濃青にふるへる海の中で、  
かゝやく海豹を追つてもがいてゐた。  
それを眺めてゐるうち、  
いつかわたしも裸になり、  
若い、壯な海豹の群に交つて泳いでゐた。  
尻尾で水をうち、身を振ぢ、ひねり、  
又は俄に躍り立つて、  
ひゞわれる氷や鹹い淵瀬の中を進みながら、

友と並びつ、もぐりつ、  
 やがてわたしらは、それら  
 打ちあたる巨きな白い死の塊を後あとにして、  
 つひに遙かな無人の浮氷の上に、  
 音なく降りつむ雪の下に、  
 あへぎく横たはつた。――  
 雪は白く細かに、  
 をはりのない極地の夜を降りつもる、  
 とこしなへに無人の岸邊に  
 降りつもる。  
 やがてわたしはその冷たく白く  
 降りつむ眠の下にふかく埋れる。  
 ふかく降りつむ眠の、

降りつむふかき眠の……

馭者(一)にはかに鞭を鳴らした。  
 わたしは驚いて腰掛を掴つかんだ。  
 目醒めれば相も變らぬ街なかの暑さ苦しさ。

――新らしい詩の味ひ方――

(一) 臺灣北部の港、  
長崎より六二  
八哩。

二五 臺灣の旅 その一

一 臺北に入る

船が基隆(一)に着いたのは七月十六日の未明、五時頃ボーイ  
 に呼覺されて起上ると、總督府の人々がわざわざ出迎はれ  
 て居る。導かれて停車場前の一旗亭に小憩。窓外の山を見れ

故國  
取りよろふ

ば、すでに故國と同じからず。瀬戸内海あたりで見慣れた美しい圓錐形の取りよろうた山ではなくして、いかにも形の不規律な、幾重にも皺の折重つた山である。汽車中の座席に籐を敷いてあつたのには、さすがに熱國らしく感じた。沿道の景色も何となく物珍しい。晝顔の花も眞紅である。絲瓜の花は眞黄である。葉の潤い蘭科の植物や芭蕉など、内地では植物園の温室で見たものばかりである。強烈な赤、黄、緑の色彩が交互に汽車の窓を掠めて行く。田はすでに刈収めて、積んである稻穂の傍は、や第二回の植付が始つて居る。古今集の「きのふこそ早苗取りしかいつの間に、稻葉そよぎて秋風の吹く。」といふ歌を思ひ出して、夏だか秋だかわからぬやう

(一)基隆の南方八里、總督府の所在地

(二)官幣大社、神北白川宮、祭久親王、明治三十四年創建

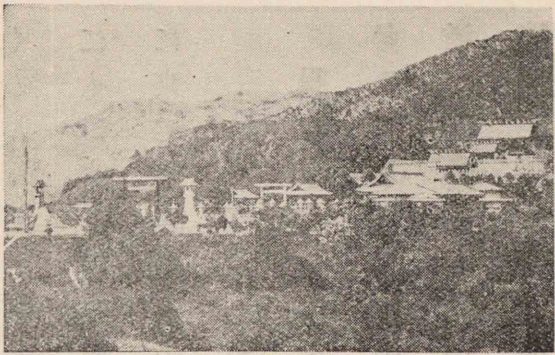
な氣がする。急行で二三の驛を通過して、九時臺北(一)に着く。多くの人々の出迎を受けて驛前の鐵道ホテルに入れば、ここにも遠來の勞を慰めてくれる友人がある。始めて臺灣に來て舊識の人の多いのに驚きもし、喜びもした。

二 臺灣神社

服裝を改めてホテルの自動車に乗り、直ちに臺灣神社(二)に參拜する。相思樹さしじゆの並木がある一直線の坦路は即ち勅使街道で、明治橋を渡つてや、坂道にかゝり、劍潭山上の神社の境域に達する。境内には大樹木はないが、その位置といひ、社殿といひ、申分がなく清淨を極め、森嚴の氣に満ちて居る。廣前に額づきて、今更ながら故宮の御偉績をしのび奉ると同

Style.

(二)臺灣は一名を  
高砂といふ



臺灣神社

時に、この新領土にこの官幣社の鎮座あらせられることは、  
國民教育の上に偉大な効驗のあることを感じた。すべての  
官廳、學校等が種々なスタイルの洋風  
建築の中に、この社殿の白木造は、誠に  
よく國民性を代表したものである。故  
宮妃殿下が御參拜の折

この島のあらん限りは輝かん  
名も高砂(二)の神のみいつは  
と詠ませられたと承るもかしこしや。

三 北投温泉

翌日から三日引續きの大風雨で諸所の出水、汽車も數箇

所切れたといふ。途、士林を過ぎて、往年學務官吏遭難の顛末  
を聞く。領臺以來すでに二十年、今は何處へ行つても、諸般の  
設備が充實して居るが、當初  
の不便困難は想像に難くな  
い。今日の臺灣となるまでに  
は、多大の犠牲の拂はれたこ  
とも記憶せねばならぬ。さて  
臺灣の地質は全體に水成岩  
であるが、この邊一帶は火山岩ださうで、ここに温泉の湧出  
て居るのも、日本の領土になる因縁があつたやうである。山  
の形も圓くて、浴衣を着て欄に凭つた時は、箱根山に居るや



北投温泉



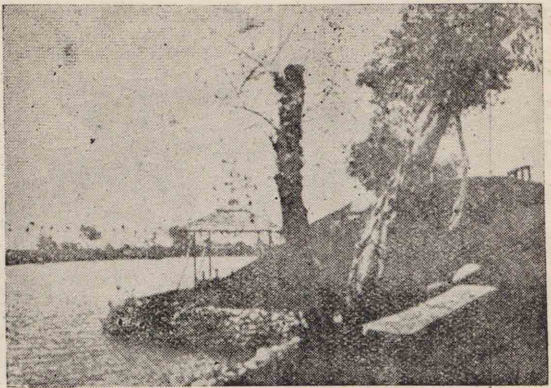
一視同仁

うな気がした。この地の公共浴場は、内地には見られない規模の大きなものである。浴槽は五間に十間もあらうか、深い所は背がやうく立つほどである。優に幾人も游泳するに足りるのである。休憩所も廣いし、西洋料理店もある。近傍一帯の地を公園として、花壇も作られてある。總督の一視同仁の主義から、臺灣人も内地人同様に入浴を許されて居る。

四 臺 中

汽車の復舊事業は迅速に抄取つて、もう徒歩連絡で南部へ行かれるといふ。朝の急行で臺中へ向かひ、日暮方にやつとそこへ着いた。街衢は極めて整然として居る。公園の規模はなかく、大きい。ここにも臺中神社があつて、故宮の御功

(一)臺灣中部の都會。基隆より約五十里。



臺 中 公 園

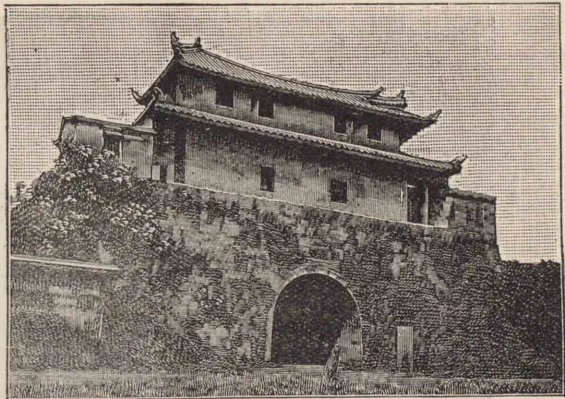
績を傳へて居る。公園内の香園閣、總檜木作で、内地にも珍しい大建築である。庭園も純日本式で美しい。宿屋の寝心も悪くはないが、夜中をりく守宮の鳴聲を聴くのは感心しなかつた。壁の上のきりぎりすは歌にもなるが、天井の守宮は稍無氣味である。

二六 臺灣の旅 その二

五 臺 南

(一)臺灣南部の都會  
(二)臺灣の中部に在つて、本島第一の大河に中部の合歡山に發する  
(三)State.

濁水の大鐵橋を通つて臺南<sup>(一)</sup>へ向かつた。濁水溪とは眞にその名の通り、水は全く眞黒である。ちやうどどぶ泥のやうな色をして居るが、これはスレート<sup>(二)</sup>を流すからであるといふ。それ故下流では漉して飲水にもするとのことである。何にせよ、濁水滔々といふ有様で、實に汚い。歸途箱根を通つた時、山も川も日本ほど美しい國はな



臺南南大門

いとつくづく感じたことであつた。まづ北白川宮御遺蹟所を見る。小さなやかな拜殿の後に、薨去當時の御居間がそのまゝに保存し

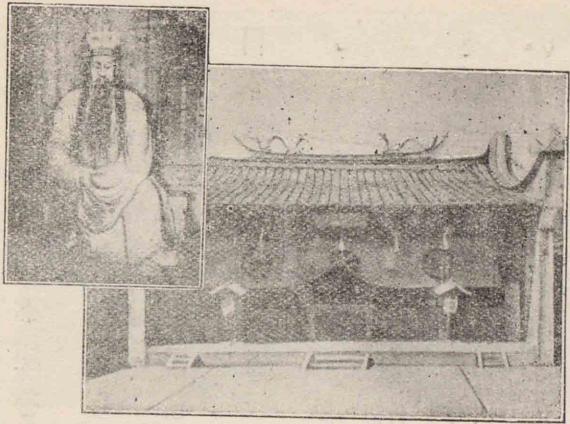
てある。當時御使用の御寢臺、御椅子、御便器まであつて、そろに當時の御不便をしのばしめる。炎熱瘴癘の氣を冒して、征討の事に當らせられ、途中御發病にも御無理をなされ、終にここに御落命になつたのは、實に御痛はしい極みである。日本武尊の御再生と申し上げるより外はない。

臺北融々仁政成。皇軍到處湧歡聲。

旭光將被臺南地。殲彼渠魁安萬姓。

といふのが、臺南に向かはせられた時の御作である。灣裡といふ所から臺南まで今は汽車で一時間であるが、當時は輻に召されて一日路であつたといふ。その灣裡から御容態が急にお重りになつたといふことである。當時の御事を考へ

(一) 支那明朝の末  
 生人平戸で  
 朝の亡びを  
 復す。明  
 てその成らな  
 康熙元年(一  
 三三三年)死  
 二。この國性  
 とは人のこ



開山神社と鄭成功の像

れば、汽車の少しくらゐるの遅刻などを、かれこれいふべきではない。御遺蹟所を拜してから、開山神社に參詣する。これは鄭成功を祀つた廟であつたのを、領臺後開山神社として縣社に列せられたのである。舊い支那風の廟に、日本の注連繩を張つたところは、何となく不調和に見えるが、致方がない。鄭成功の事は日本の演劇にもなつて、誰でも知つて居る。その母たる人は日本人であつたので、日本人の忠義の血がやはりその體中には流れて居つたのである。社前

の繁つた榕樹は、自ら敬虔の念を起さしめる。すべてこの邊榕樹が非常に多い。臺灣の松の木といつて居るさうである。

六 製糖會社

南部は一面の平野で、風光が更に熱國らしくなつて來る。北緯二十三度半の回歸線は嘉義の少し南方に當るので、そこに目標が立ててある。芭蕉の島、檳榔樹の林などは、南方に行つて特に目立つ。鳳梨などがなつて居るのも見える。見渡す限り米田と甘蔗畑である。水牛や黄牛の水につかつて居るのや、豚の子が歩きまはつて居るのが、日本の農家とは違ふ。農家は皆竹林を繞らして墻として居る。暴風を防ぐ爲であらう。所々に高い烟突、大きな煉瓦の建物の見えるのは製

(一) 臺南の北方十五里

糖會社である。砂糖は近年までは外國からの輸入を仰いで居つたのであるが、今日では最早内地の需要を充たし得るばかりでなく、海外へ輸出するやうになつた。これだけでも大した富源である。

七 出發

十七日に着いて二十九日に出發。發着の日を合算して十三日間である。何等の觀察も研究もない。暑いことは暑い、思つた程ではない。領臺以來今日までに作り上げた代々の總督、長官の骨折、その他民間の人々の苦心は、實に察するに餘りがある。諸所に銅像があつて、これ等の人々の功績を語つて居る。後代の人は永くこれ等の銅像に對して明治時代の偉績をしのぶであらう。舊知の見送を受けて、基隆碇泊の備後丸の船客となつたのは、七月二十九日の午後であつた。

二七 我が南洋

山崎直方

開拓  
(一)維新の元勳  
舊鹿兒島藩士  
甲東と號した。  
明治十一年薨  
年四十八。  
蜿蜒起伏

官遊

小笠原島二見港の灣頭に一基の石碑がある。同島開拓の碑で、明治十年の建立。その碑文は實に時の内務卿大久保利通の撰に係る。文の中に「甲斐伊豆之山、蜿蜒起伏、至此□□、乃我南門也」の句がある。この闕文は初は「而盡」とあつたが、嘗て志士某がこの地に官遊した時、これを見て不祥の言であるといつて、直ちに鐵槌を揮つてこの二字を碎破し去つたのである。槌痕斑々鮮な裡に、今なほ臙げにその二字を髣髴す

呼應す

ることが出来る。もとより伊豆の山脉がここに盡きず、遙かに南洋の諸島と相呼應してゐることは、争ふべからざる自然の地形であるが、しかも彼のこれを碎破した意志は、寧ろその句が帝國の南進を呪ふが如くに見えたのを憤慨した爲であつた。余は先年この碑に對して、これが一場の惡戯でないことを諒としたとともに、當時歸航の途すがら、その頃すでに南洋カロリン、ビスマーク諸島と交通して奇利を博し來つた商人等と同船して、その探檢談を聽き、深くその意氣に感じつゝ、私かにこの槌痕が他日の好讖たることを祈つたのであつた。烏兎匆々ここに十餘年、全歐戰雲の餘波は又太平洋上に及んで、獨領諸島の或者は我が帝國の統治す

〔Caroline. 太平洋中の群島。ミクロネシアの一部。六百八十個の島より成る。〕  
〔Bismarck. 太平洋中の群島。ニューギニアの東。〕  
奇利を博す  
好讖  
烏兎匆々

會心

るところとなつた。さうして余も亦南征の客となつてその地理を探るに當り、會、我が乗船のこの港にかゝつた時、舷頭近く碑のある所を望んで、彼の志の今や始めて酬いられたことを懷つて、轉た會心の笑を禁じ得なかつたのである。

回顧すれば大正三年八月、日獨の國交破れて以來、我が艦隊は西に東に活動し、九、十月の交第一南遣枝隊がまづマーシャル諸島のヤルト島を占領したのを手はじめに、十月七日には第二南遣枝隊がヤップ島を占領し、引續いて東西カロリン諸島、マリヤナ諸島を占領し終つたのである。さうして我が艦隊と同時に行動を起した英國の濠洲艦隊は、他の獨領諸島を逐次占領し、恰も赤道を境界として、日英兩國

〔Marshall. 太平洋中の諸島。〕  
〔Jaluit. マーシャル諸島中南部にある細長い島。〕  
〔Yap. カロリンの西部にある島。〕  
〔Mariana. 小笠原島の東南太平洋上の諸島。〕

劃然

(1)Guam.  
一八九八年北  
米合衆國領と  
なつた。

(2)Micronesia.

(3)Ponape.

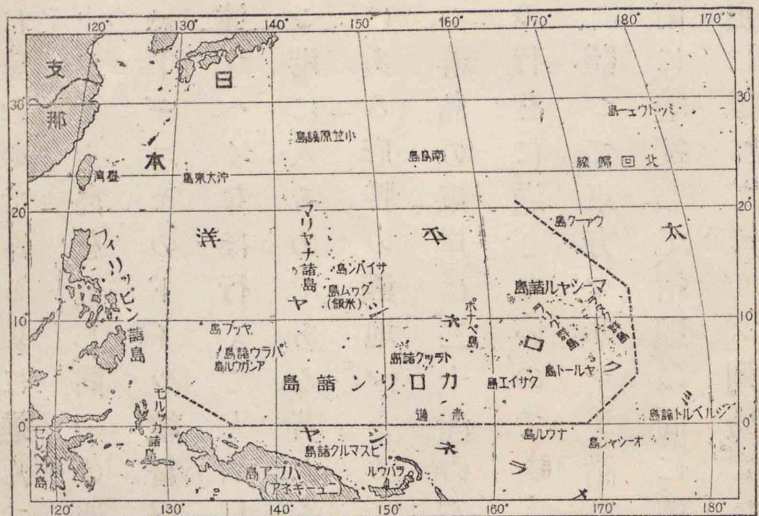
が獨領太平洋諸島を劃然南北に二分した形になつた。かくて今日我が統治に歸してゐる地方は、マーシャル諸島、マリヤナ諸島(合衆國領グアム島を除く)と、東西両カロリン諸島である。これ等の諸島はその總稱のミクロネシア(微小)といふ名に背かず、眞に微細ないくつかの島群である。その最も大きいといはれるポナペ(三)ですら、隱岐の島くらゐの大きさであつて、七百有餘の島嶼、岩石、その全體の面積を合はせて漸く百七十方里、即ち沖繩諸島に小笠原島、それに澎湖島を加へたくらゐるで、縣にすれば、まづ神奈川縣か佐賀縣より少し大きいくらいである。しかもそれが北緯二十度附近から、南の方赤道に至るまでの間、熱帶圈の中に亘つて、南

綺羅星の如

匹敵す

經濟速度

(4)Uracas.



北一千二百哩、東西二千五百哩の廣大な水面を蔽うて、綺羅星の如く撒散らされて居り、その水面の廣さは、ほゞ濠洲大陸全土と匹敵せんばかりである。されば小笠原島の二見港より汽船に乗つて、一時間僅かに十哩の經濟速度を以て南に進むとせば、一晝夜ですでにマリヤナ島の最北に聳える火山島ウラカスの圓錐峰を、水平線上

中樞地

(1)Truck.

(2)Rabaul.

(3)Brisbane.  
濠洲大陸の東岸

(4)Palau.

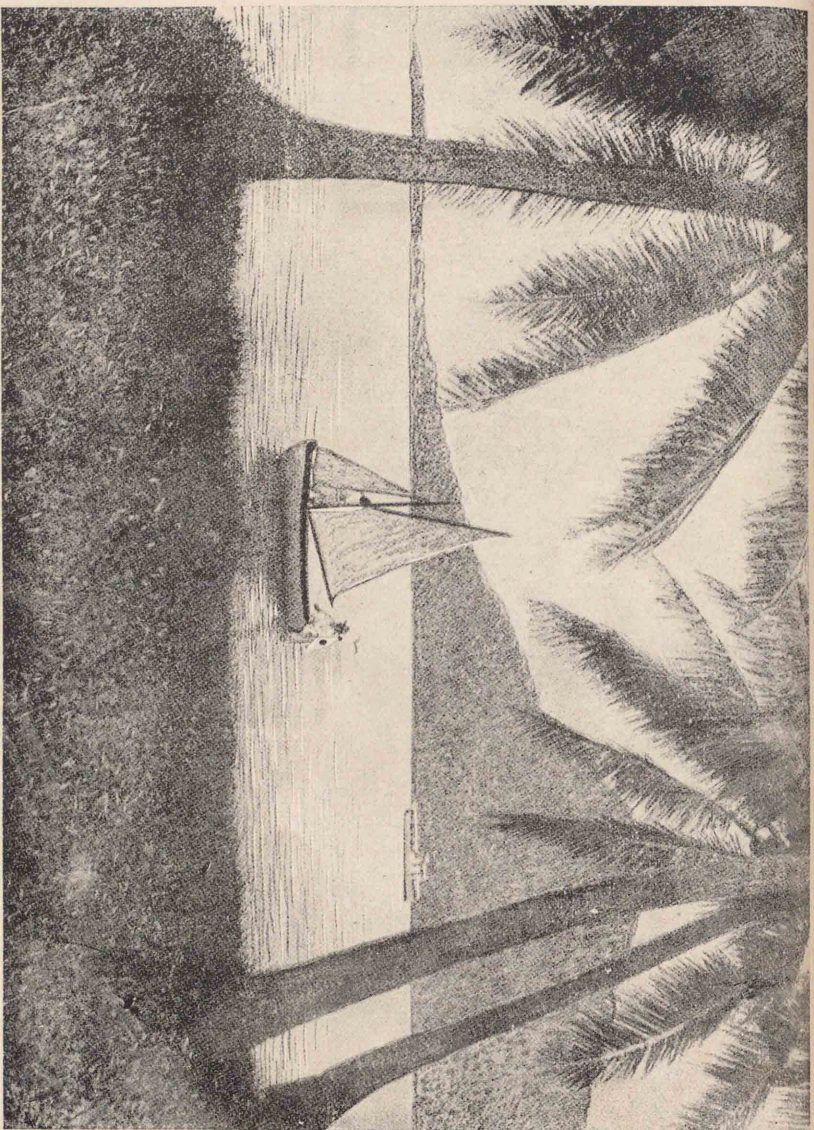
(5)Malakal.

(6)Philippine.

に望むのである。更に進んで我が占領地域の中樞地點たる  
ト<sup>(一)</sup>ラック島を發し、同一の速度を以て南すれば、三晝夜でニ  
ューギニヤのドイツ總督府所在地であつたラ<sup>(二)</sup>パウルに到  
達すべく、なほ行くこと六日ですでに濠洲大陸のブリスベ  
ン港に入るのである。若しそれ西カロリン諸島<sup>(三)</sup>バラウ群島  
にある形勝の錨地<sup>(五)</sup>マラカル港より西へ向かへば、フ<sup>(六)</sup>イリビ  
ン群島の東岸は、二十哩の巡洋艦を以てして、僅かに一晝夜  
の行程に過ぎないのである。

翻つて東方マリヤナ諸島の方面を見るに、その島列は東  
南に蜿蜒して、指顧の間に英領<sup>(七)</sup>ジルベルト列島を起し、島脉  
更に延びてエリス列島<sup>(九)</sup>となり、ポリネシヤ方面に渡る飛石

(8)Gilbert.  
(9)Ellice.  
(10)Polynesia.



旗章日る翻に海領洋南

竿頭一步を  
進む  
指を染む

となつて居る。我が有爲な企業家は、すでに竿頭一步を進めてジルベルト島に渡り、椰子貿易に指を染めて居るものすらある。

叢爾

一子よく全  
局を制す

觀じ來れば、我が占領諸島の位置の無意味でないことが察せられるであらう。叢爾たる幾十の島嶼は、さながら碁盤の面に布かれた碁石のやうなものである。これを巧に活用すれば、一子よく全局を制することが出来る。政治的發展、經濟上の活動、その他各種の行動に利便を與へることが決して少くないのである。況やこれ等島嶼そのものに於ける自然の資たまものは、すでに相當に豊富であり、しかもなほ開發の餘地があると信ぜられて居るのである。

——我が南洋——



二八 正覺坊

北原白秋

Siberia

麗かな麗かな、何ともかともいへぬ麗かな小笠原の初夏の一日である。宮の濱の白い弓形の渚から、影の青いバナナ畑の方へたどり上る小徑のそば、小灌木林の境界線に近く、一本の光り輝く護謨の大樹が高く高く揺めいてゐる。その下に正覺坊が仰向に轉がされてゐるのである。たゞそこにどこから轉がつてゐるともなく、轉がされてゐるから、たゞ轉がつてゐるといふ風である。大きな大きな正覺坊が、ゆつたりと、まん圓い卵色の腹の甲羅を仰向けて、たゞ轉がつてゐる。無論四肢は固く結へられてゐるので、その鰭を動かす

ことさへ自由でない。圖體は大きいし、二條の太い荒繩までがぐる／＼巻に食ひこんでゐる。それでなくとも、一旦轉がされたが最後、一日かゝつて起返るか、二晩かゝつて起きられるか、この大様なのろ／＼の海龜の身では、何だか頗る怪しいものである。うれしいのか、悲しいのか、苦しいのか、又はとう／＼諦めはててしまつたのか、これぞといふ気分も見えない。たゞ首を當りまへに出して、當りまへに目をあけてゐる。そして何のこともなく空を見入つてゐる。尤も、それも仰向いてゐるから、目が空に向いてゐるといふだけである。澄渡つた明るい天の景色を見つめてゐるといふのか、又は麗かな雲のゆききや、風の流に恍惚と思を凝らしてゐると

いふのか、それとも碧瑠璃な大海の響、檳榔、椰子、バナナ、種々な熱帯の植物の匂を現心もなく嗅分けて、懐かしい生まれの海の波のまに／＼、靈魂を漂はしてゐるのか、何が何とも譯のわからぬ夢見るやうな眼をあけてゐる。

時は正午である。初夏といつても小笠原の初夏は暑い。太陽は直射し、愈、護謨の大樹の眞上から強烈な光の嵐を浴びせかけると、燦爛たる護謨の厚葉が、枝々に限りもなく重り合つて、眞青な油ぎつた反射を、影とともに空いつばいに揺めかす。その葉を潜つて来る光線は、鋭い原色の五色である。それが幹に當り、下に寝てゐる正覺坊の腹を燬葉きつける。さうして愈、新緑と黄の點々に模様づけられた綺麗な海龜の

頭が、軟な雑草の上に更に艶々と光り出し、麗かな何ともかともいへぬ空のあたりで檳榔の葉がそよぎ、鶯の鳴く聲が聞えてくる。

十方無碍光、澄輝く白金  
寂寞世界の一時である。

正覺坊は眩しさうに目をあけたり閉ちたりしてゐる。現心もないらしい。ただゆつたりと轉がされて



小笠原島の正覺坊

ゐるので轉がつてゐる。大安心のかたちである。恐らく自分が囚はれの身であることすら忘れてゐるに違ない。

微風がをりく、護謨の枝々をそよがして去つた。幹の中程に一流ながれた海の美しさ。向ふに兄島が見え、麗かな麗かなその瑠璃色な海峽を早瀬に乗つて、白い三角帆を上げた獨木船が走つて行く。さりながら正覺坊にはその海が見えない。頭を海の方に向けては寝てゐるが、背後には護謨の樹の幹があり、海岸煙草の毛深い葉の叢がある。たゞこの島の四方八方を取圍んでゐる太平洋の波のうねりが、どこからともなく、緩い調節を間のびに折疊んでゐる。それだけさはすが正覺坊の痴鈍な感覺にも、稍何らかの響を傳へるらしい。正覺坊は目を瞑つて、また目を開いた。

コケッコッコケッ……コケッコッコケッ……物に

(1) Postand.  
フランスの劇  
詩人、西曆一  
八六八年—  
九一八年—  
(2) ロスタン作  
物寓劇シヤ  
ントクレ  
(Chantecler)  
の主人公の雄  
鶏の名

驚いた鶏の鳴聲が、丘の下の農家の方から聞えて来る。畑の甘蔗やバナナの葉蔭を分けて、こちらへ逃げて来るらしい。一羽、二羽、それが次第に近づくにつれて、鳴聲を潜めて来る。かと思ふと一羽の雄鶏が、やがてロスタン<sup>(1)</sup>のシヤントクレ<sup>(2)</sup>のやうな雄姿を現した。白い舶來種の雌鶏が、何かを啄きながらついてくる。そのトタン、奇怪な大きい正覺坊の圖體が、ふいと前に轉がつてゐるのが目についた。と、忽ち驚の叫を立てて、ケケッコッコケッ、ケケッコッコケッ、ケケケと逃げて行く。そしてまたひとしきりせはしさうな叫聲が、甘蔗の向ふから聞える。

正覺坊はそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大

空を見上げてゐる。温和さうな空色の瞳が艶々と潤みを持つて、たゞじつと麗かな天の景色に見入つてゐる。恐らくは傍に何事が起つたかも知らないであらう。身動きひとつしやうともしない。

— 白秋小品 —

(一) 小説家、東京の人。

宿かり (自修文)

志賀直哉 (一)

大きな榮螺さざなめの殻に入つてゐる宿かりが、岩の上から、下に澤山集つてゐるきしやごを見下して、「小さいな。」と思つた。相變らずうぢらぢしてゐるやがる。」と腹で冷笑した。彼は以前自分がその殻の一つに入つて、仲間のやうにしてゐたことを憶ひ出して、自分ながらも、よくもこんなに大きくなつたものだ。と己惚おぼれた。宿かりは勢よくきしやごを押分けて岩を驅下りると、一度宙返をして、どぶんと海の

中へ飛びこんだ。「わあ。」といふきしやごどもの笑ひ囁ささす聲が聞えた。「ばかどもが。」かう思ひながら、彼は大きなもののみが感じられる寛大な心持を味はひながら、海の底をのそ〜と歩いてゐた。

彼は傍に何かごり〜といふ音を聞いた。見ると、それは自分より大きな榮螺が、そろ〜と岩を這上つて行くところだつた。彼は急にたまらない耻づかしさを感じた。彼は榮螺に見つかからないやうに、拔足ぬきあし差足さしあしそこを退いた。一人になると、彼は急にむか〜と腹が立つて來た。さうしてすぐ無理やりに自分の殻を脱いでしまつた。砂地を今度はそろ〜と臆病に這つて行つた。柔い尻が砂で擦れて、痛くてやりきれなかつた。彼は苦しんだ。一日一晚苦しんだ。さうしてやりきれなくなつた時に、ちやうどそこに非常に大きな法螺貝ほら貝の殻を見出した。それは、きのふ彼を脅おびやかした榮螺よりも、更に更に大きかつた。彼は靜かに尻の方からその中にもぐりこんで、やつと安心した。その貝は重く、且彼の身體にはゆる〜だつた。が、構は

ず苦しい思をして、それを曳きずつて歩いた。

彼は又、大きくならうといふ慾望に燃立つた。一年程経つた。さうして彼は驚くべき發育で、その法螺貝の中に一杯になるまで育つた。もうそれを曳きずつて歩くことは何の苦もなくなつた。彼は餘りいらくしなくなつた。前ほどには大きくならうといふ慾望も燃立たなくなつた。その時彼は偶然又すてきに大きな法螺貝に出つくはした。彼はびつくりした。殆ど氣絶しかけた。彼は榮螺の殻に入つてゐた時大きな榮螺に會つた時よりも、倍の倍も自分を耻づかしく感じた。腹を立てるにしては、もう力が足らなくなつた。彼は全く自分に失望した。自分がどれほど大きくなるにしても、そこにはいつも自分だけの大きさの貝殻がなければならぬと思つた。彼は全く絶望してしまつた。

彼はすぐさま自分の入つてゐた法螺貝を捨ててしまつた。彼は又殻なしで、痛さを我慢して、そろ／＼と大病人のやうに海底の砂

けけん  
ふしきさう。

地を這つて行つた。時々その傍を、輕蔑するやうな横目使をしながら、伊勢蝦いせえびがびん／＼と勢よく跳ねて通つた。龍りゆうの落子おとしこがげんな顔をして、立止つて彼を見送つてゐた。彼は愈、やりきれなくなつて來た。それでもまだ何か求めるやうに、海の底を一方へ一方へずるずると、その柔い腸はわたの尻を曳きずつて歩いて行つた。路々彼がはいれるくらゐの大きな法螺貝の殻にも出會つた。しかし彼は今更それにもぐりこまうといふ氣はしなかつた。

彼は極端に憂鬱ゆううつになつた。力も萎なえて來た。彼はもう自分も死ななければならぬと思つた。なぜ自分の生涯の結末がこんなにならなければならぬかつたらうと考へた。それよりも「何がたゞの宿かりでゐられない慾望を自分に興へたのだらう。さうしてそれは何の爲だらう。」と考へた。彼がきしやどの殻にゐた頃の夢想は、疾うの昔現實にされてしまつたのだが、それは彼に何の幸福をも持來さなかつた。彼は常に満たされずに來たのだ。彼の精神も肉體も、だ

んだんにまゐつて來た。さうく動けなくなつた。さうして死んでしまつた。

—白樺の森—

二九 談義僧

柴田鳩翁

或人の道歌に、

あざみ草その身の針を知らずして

はなご思ひしけふの今まで

よう考へてごらうじませ、長い物は長う見える、短い物は短う見える。お互に長みじかを見ちがへは致しませぬ。それゆゑ人の我を悪しくいふのは、必ず見違へのない事ぢやこ

心得て、我が身を顧るのが近道ぢや。これで思ひ出した話かござります。

或山家より京の町へ談義僧を招待に參りました。折ふしその日は雨ふりで道もわるく、駕籠をもつて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠に打乗り、京を離れて四五里許と思ふ所で、どうした事か、駕籠の底が抜けました。いたはしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら駈廻つて、繩きれ多く拾つて來て、やうくと駕籠をからげ、さて和尚に再び「お乗りなされ。」といふ。和尚も氣味わるけれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中に歩くも外聞悪く、不承々々駕籠に乗る時、これ駕籠の衆、もう底は抜けは

不承々々

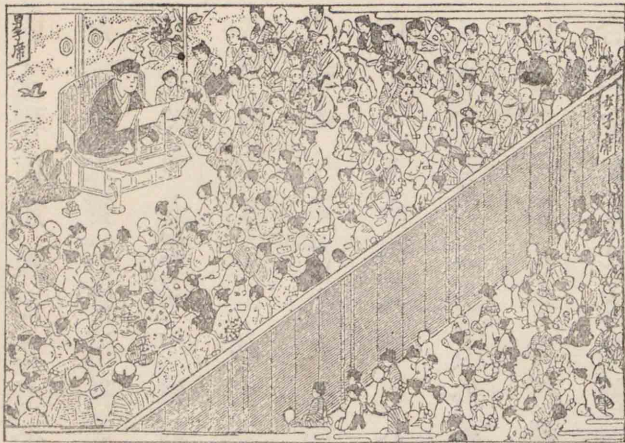
すまいか。「いえ、氣づかひはござりませぬ。」といふゆる、乗  
 移ると昇<sup>かき</sup>上げるとの拍子で、また底がめき、いふ。和尚大  
 きに肝を潰し、これではなか、安心がならぬ。御苦勞なが  
 ら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。「い  
 はれる。人足も尤もに思ひ、また繩きれを拾ひ集め、合羽の上  
 を豎横十文字にから<sup>ら</sup>げ、これではあやまちはござるまい。」と、  
 道を急いで或村を通りか、つた。

法談

勸化  
 無常迅速  
 會者定離

折節この村に法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸  
 り足にこの駕籠を見つけて、肩衣をかけたる親<sup>おや</sup>仁が、傍の媪  
 にいふには、なんと皆の衆、けふの御勸化は有難いことでは  
 ござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離

のことわり、何時<sup>たぎ</sup>如來様のお迎があらうやら知れぬが人の



心學の講義

身の上。あれ、あの駕籠を見さつし  
 やれ。どうしても京へ奉公にいた人  
 が死んだと見えて、死骸を在所へ  
 つれていぬると見える。さてもは  
 かないものぢやござらぬか。「とい  
 ふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞き  
 つけ、さては我を死人と心得たか。  
 いま、しい。」と、わざと駕籠の中  
 で咳拂すると、かの老人はこの咳  
 拂に驚き、急に傍へ飛びのき、小聲になりて、死人ぢやと思ふ

たら、どうしても科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。」といふ。和尚愈、腹を立て、今はたまりかねて、駕籠の中でちだんだ踏み、大聲あげて、「科人ではおられない。」といふ。その聲にまたびつくりして、「さては科人ではなうて、どうしても氣ちがひぢやさうな。」といはれた。これが面白い話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもののゆゑ、誰に見せても死人ぢや。然るに中からもいへば、「科人。」といふもことわり、又「氣ちがひぢやさうな。」といふのも、外からこじつけていふのではない。皆この方にその相、その模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。善いものを悪いとは人はいはぬ。何事も身を省るのが肝心ぢや。或人の道歌に、

合點

世の中は何もいはずに伊豫簾いよすだ

その善惡よあは人に見えすく。

——續鳩翁道話——

三〇 立 秋

永 井 荷 風

心づけば軒裏くゞりて斜にさしこむ西日益、斜になりて、日の暮れさま俄にあわたゞし。

日盛の暑さはもとよりきのふに變らねど、吹く風に怪しき力籠りて、掛物の軸床の間の壁を打ち、煙草盆の灰飛散り、机上の瓶花亦落つ。庭樹の戦ぐ音、高き所より水打捨つるが如き響す。

空には雲夥しく湧出で、崩れつ動きつ異様の形をなせり。



空の色雲の間より見れば、いふばかりなく澄みて青し。

渴を覺ゆること却つて夏にまされり。汗ばみたる肌にさつと吹く風、心地悪きまでつめたし。

蟻頻りに縁に上る。雀庭の飛石の上に恐しきまで肥えふとりたる芋蟲を争ひ啄む。

新竹漸く伸び、その皮風に落つ。梅櫻のたくひすでに病葉の夕風に散るあり。青木の古葉黄色し。

蚯蚓鳴く。蝶を見ること春夏にまさる。夜々火取蟲讀書を妨ぐ。夜始めて長きに驚く。

窓を開けば天高く星斗森然たり。萬感自ら湧く。

荷風全集

三一 風と露

三 好學

一 風の音

草木が風を受けて、葉枝又は莖を動かして一種の音を發したり、又木枯に木の葉が慌しく飛舞ふさまなどは、いかにも面白い眺である。秋の野の芒すすきの風に戦たたかぎ、河邊、湖邊、海邊などで萩あやむぎ、蘆あし、菰こもなどが風を受けてざわ／＼音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲もなく、又さしたる空氣の動搖もないのに、森や林の梢で何となく音がして、秋風の渡るの知らせることがある。彼の松韻、松籟などいふのも

松韻  
松籟

これと同じわけで、別段に強い風も吹かぬのに、松の梢では一種の音がする。これはやがて空には多少の風のあることを示すのである。須磨、明石の海邊、又は東海道五十三次の松並木などで、晴れた日の夕方又は月の冴えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある。昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも尤もである。

枝垂柳の風に靡くさまを見ると、微風では多くの枝がそよそよと一緒に動いて、風新柳の髪を梳る。といふやうに、優雅な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髪の毛のやうに、東に、西に、南に、北に舞狂ふ。亦一種の壯觀である。竹藪の風を受ける具合も、多少これに似てゐて、風に逆ら

〔一〕氣霽風梳新柳髪。水消波洗舊苔鬚。〔朗詠集〕

はずに動くところに趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌つて居る、

吹く風になびきくゝて争はぬ

こゝろや竹のみさをなるらん。

一一 露の色

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見ると、葉に綺麗に着いて居る。殊に、稻、蘆などのやうな禾本科の植物や、露、やぶかうじなどの葉の縁には、小さな水玉が規則正しくのつて居る。又竹の葉の先にも、同じやうに綺麗な露の玉が宿る。

かやうに、稻や竹の葉の先、又は露、やぶかうじなどの葉の

凝集

縁に着く水玉は、空氣中の水分が凝集したのではなく、植物體の中に澤山に溜つた水が、葉の縁又は先にある小さな孔から夜中外へ濾しだされて出來たのである。植物の中から出る水は、いつでも葉の中のきまつた部分に着くがさうでなくて、葉の全面に銀色の小さな水玉が不規則に着いて居るのは、空氣中の水分から出來た眞の露である。

露に逢ふと、草がいかにも涼しさうに、且新鮮に見える。熱帯の沙漠の或地方では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出来る。すべて露は夏の盛、晝間熱く、夜から明方にかけて熱度の急に下る時に多く出来るもので、日中の暑さに萎れかゝつた葉や莖も、再び蘇つたやうになる。露はかやうに植物の生存上に大切な關係があるばかりでなく、朝な夕な清新な美觀を夏草の上に與へるものである。

—植物生態美觀—

三三 月の戰場が原

田山花袋

林立す

(一)下野國日光山中男體山の西麓

瀑に別れ、水聲に遠ざかりて、一步ごとに低き坂を登れば、骸骨の如き瘦果てたる枯木の影、幾株となく路の両側に林立して、次第に現れ来る月の光の淋しさ又凄さ。  
「これより戰場が原。」

と我は低き聲して友にさゝやきつ。  
友も眞面目なる或感に觸れたる如く、いつもの快活にも

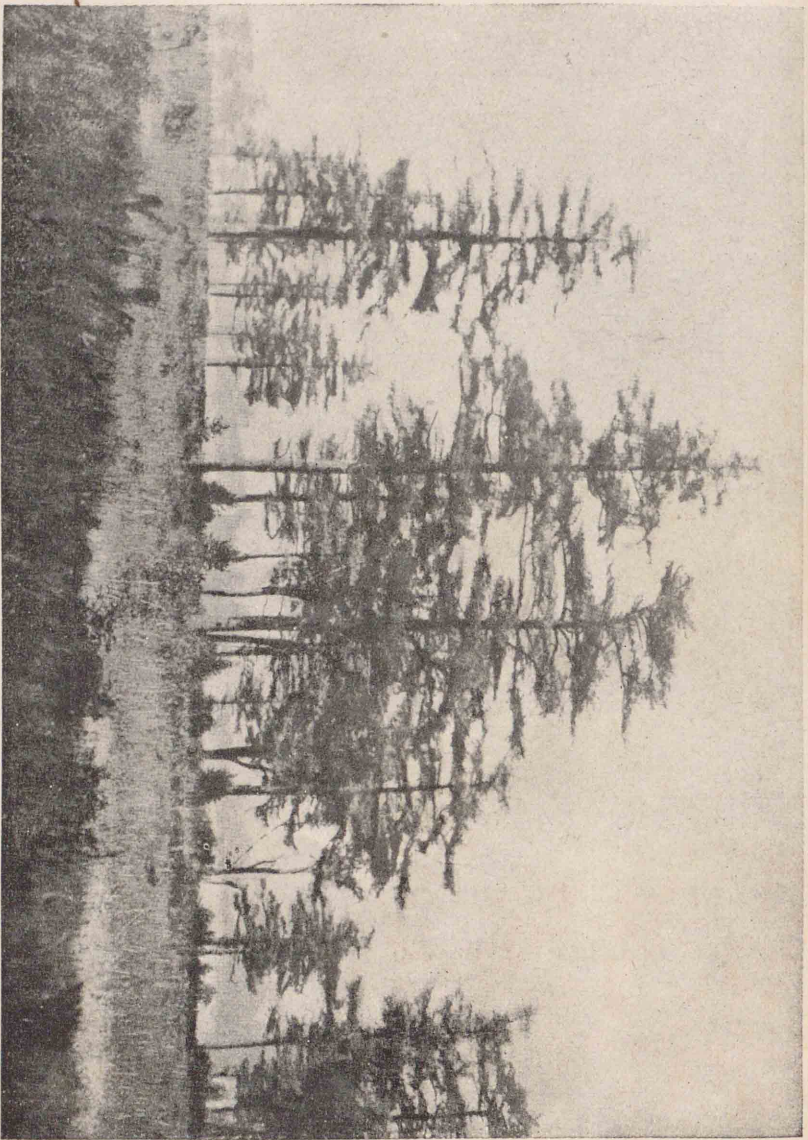
似ず、たゞく沈黙してたどり行く。やがて龍頭瀧の水聲の遠く遠く最早聞えぬあたりに來りし時、我はいつもの如く足をとめて振返りぬ。

<sup>(一)</sup> 中禪寺湖は一曠の下に。

黒き四山の間に挟まれつゝ、鏡の如く月の照りたる湖水の美しさ、又静けさ。誰かこの景を人間界のものと思ふべき。我等は或秘密に觸れたるものの如き心地したり。

「美しからずや。」と我のいひしは、それよりなほ久しき後なりき。されど友はこれに向かひて一語だに放たざりき。人は或大なる物に觸るゝや、沈黙なるもの快活となり、快活なるもの沈黙となり、或は憂ふるもの舞ひ、喜ぶもの泣くといへ

<sup>(一)</sup> 東西三里、南北一里、周囲八里。その水は落ちて華嚴瀧となる。



原ヶ場戦

り。我等の今の感は恰もそれなり。



路はやがて婆娑たる樹影の中に入りぬ。何たる寂寞ぞや。何たる荒涼ぞや。一鳥の聲なく、一蟲の音なし。否、一葉のそよぎだに、我等の耳には聞えざるなり。恰もこの天地は月と我等とのみになりたる如くに。

む。  
夏は草花のみだれ咲くを愛し、秋は金風の寂寞たるを趁

ひ、春は残雪の皓々たるを賞したる戰場が原は、ところ／＼に落葉松、榛山毛櫨などの寂しき影をあしらひつゝ、渺々として限りも知らず横たはりたるが、薄白き月はその廣々と開けたる高原を照らしもあへぬ如し。四面を圍みて聳え立つ白根、湯嶽の姿もいと寂しげなり。

「君よ。」と友は低き聲にて、この寂寞はやがて幾千年前人類の未だ生まれ出でざりし時の寂寞に非ずや。即ちこの男體山の未だ噴火せず、中禪寺湖の未だ瀦留せざる以前の。」

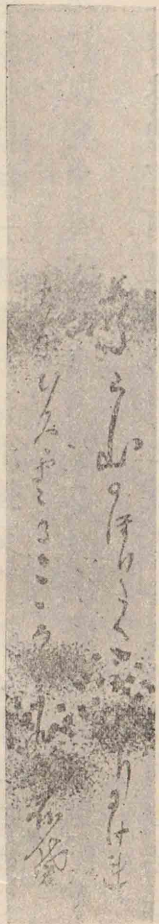
「まことに。」友の言葉に誘はれて、心は遠く現在の天地より離れて、幾千萬年の前と後とに漂ひ行きぬ。二人の眼に映れる月と山とは幾千年前の月と山とにして、二人の心に浮か

Marchen  
(童話)

ふたり山の  
ほりたくの  
そなりひけ  
れたなひく  
雲にこゝろ  
ひかてろ  
花袋

べる戰場が原は幾千年後の戰場が原の月夜なりき。

（空想にのみ馳行きたる我等は、行く／＼戰場が原のメルヘンめきたる由來を語り合ひぬ。昔々この二荒山の神靈と、上野國赤城山の山神と山中の湖水の所領を争ひたるこ



筆袋花山田

とありたりき。二つの神は互に敵視すること久しかりしが、「この上は詮方なし、干戈の上に見えて勝負を決せばや。」とて、互に雲霧を起し風雨を驅つて、その争實に百年の長きに及びき。しかも終に勝負を決すること能はずして、血のみいた

づらに原頭に溢れきといふ。

これ戰場が原の名の起る所以と。

草叢を分けて新道へと出でし路は、やがて再び榛、山毛櫸の林の中に入りぬ。かくて月光の樹影を織出せる間を奥深く進み行けば、一度隔りし水聲又喧しく聞え始めて、四面の林木に反響する音、愈高くなりぬ。湯瀑の近づきたるなり。

「これより二町湯瀑あり。」と記されたる標石を辛うじて月の光に見出しつゝ、細くおぼつかなき路を一散に傳ひ下れば、やがて樹の間より白き調布をかけたる如き大なる瀑、ばつと月にかゝやきて見ゆ。

二人は走り出しつ。

惱殺す

想像せよ、深山月夜に於ける瀑畔の景を。岩壁の上を瀉下する高さ四十五丈幅十五間の大瀑は、匹練の如く樹間より洩るゝ月光の下に瀉ぎ落ちて、亂るゝものは綿の如く、雪の如く、烟の如く、飛べるものは霧の如く、しぶきの如く、細雨の如く、その景殆ど人を惱殺せんとするに非ずや。月は絶え絶えに梢を洩れて、樹影は樹影とかくれんぼをなせり。

我等は瀑畔に踞して、ゆくりなく晃山諸瀑の批評を始めぬ。三大瀑布の中、華嚴の雄大は最も諸瀑の上に出でて、これに匹敵するものは他に求むべからざること勿論なるべし。續きて霧降の綺麗、これ亦優に第二の地歩を占むるを得ん。たゞ裏見に至りては瀧小に、俗氣多く、決して前の二者に嗣

ぎうべきものに非ず。我は寧ろ龍頭湯瀑の二瀑を以て、遙かにその上に出づるものとなさん。殊に湯瀑の絶大なる姿は、よく華嚴の雄壯につぎて、霧降も亦その後（ま）に瞠着たらんと思はるゝほどなるものを。次に來るは奥の七瀧、慈觀、方等、般若、寂光、一の瀧などなるべく、白糸、阿含、若子七瀧などは尤も品下りたるものなるべし。

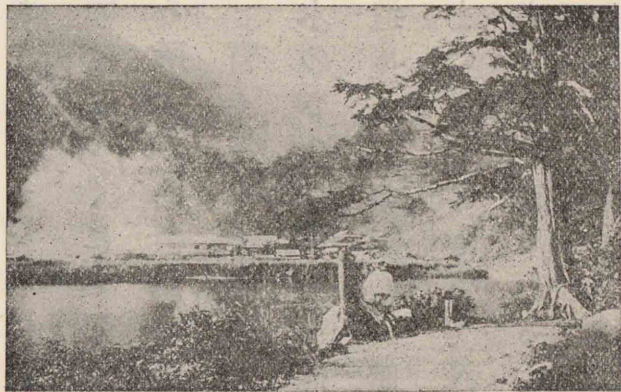
すでにして板を立てたる如き急勾配を、瀑に添ひつゝ、うねうねと攀登りて、再びかの戦場が原より來れる新道と合し、なほ四五間ばかり進まんとせし眼前に、又も不意に展げ出されたるは、寂極り冥極れる小湖水の満面に、美しき月の光を受けたる景。

湯湖とはこれなり。

削るが如き前白根山の姿、薄暗き波の上に映れる樹木のさまなど、そゞろに人の心を惹きぬ。今まで喧しかりし瀑の響は、いつくにも思ふばかりにしんとして、兎島の斗出したる所のみ白根山の翠微を帯びて、いと暗し。

暫く佇みてこの淋しきさまと、黒く岸頭を縁取りたる樹木のさまなどを餘念なく打見やりたりしが、やがて歩を進めて、その岸頭の暗き樹木の中に入りぬ。ここより温泉場までは、最早さして遠くもあらず。月光も至らぬばかり、こもりと生茂りたる古樹の林を、今一度明らかなる湖水の邊に出で、石多くして歩をつけ難き所を暫し過ぐれば、湖水の





湯 本 温 泉

西北の一隅なる蘆荻の蒼々と連り  
たる一帯の平地に、數箇の燈火高く  
低く見えわたりて、人の語り合ふ聲  
いづくよりともなく微に聞ゆ。  
なほ少し行けば、硫黄の香烈しく  
鼻を撲ちて、湖水の岸頭のところで  
ころ蘆荻の青く茂りたる間より、數  
道の湯氣の白く月光を掠めて靡け  
るを見る。

湯本の温泉場は一步の中にあり。

日光

三三三 ひとの親

親子

ひとの親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に惑ひぬるかな

藤原兼輔<sup>(一)</sup>

秋の日は山の端近し暮れぬ間に

は々にみえなん歩め我が駒

大江千里<sup>(二)</sup>

夫婦

ふるさとに今宵ばかりの命とも

しらでや人の我をまつらん

藤原武時<sup>(三)</sup>

同

みどり子を見れば涙のかずそひて

ありしむかしぞいとどこひしき

伊藤仁齋<sup>(四)</sup>

(一)平安時代の歌人。世に堤中納言といふ。承平三年(一一九一年)卒、年五十七。

(二)平安時代の歌人。醍醐天皇の朝に仕へた。

(三)菊池武時。元弘三年(一一一三年)多岐で戦死した。年四十二。

(四)徳川時代の大儒。寶永二年(一七二五年)歿、年九十九。

兄弟

松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まどみせし夜ぞこひしかりける

同

小澤蘆庵

春日野のはらからこそは世の中の

うきたの森のなげきをもとへ

朋友

平兼盛

世の中にうれしきものは思ふどち

はな見てくらす心なりけり

讀みしらす

思ふどちまどみせし夜は唐錦

たゞまく惜しきものにぞありける

明倫歌集

(一)平安時代の歌  
人村上天皇  
朝に仕へた

三四 人の香氣

竹越與三郎

昨日或席上にて、一場の談話を求められ候ひしまゝ、人の  
香」といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんこ  
とを、人々に求め候ひき。今ここに青年諸君の爲に、更にこの  
趣旨を開陳致度候。

山野に花卉少からず候へども、香芬あるものは多からず  
候。しかも香芬あるものは、藪澤の中にとありとも、人の爲に認  
めらるべく候。これと同じく、人も亦香氣あるものとならん  
ことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、その才智藝能に伴な  
ふところの精神を申すにて、何事を爲すにも漫然として爲

花卉  
香芬  
藪澤

漫然

さず、利己的に爲さず、一種の精神によりて爲すことを意味致候。苟もこの精神あらんか、その事業の大小を問はず、必ず生命あり、色彩ありて、人を動かし、人を感じしめ、人に認めらるべく候。

自敬

この身惜しむべし  
眇たる

君子は獨行影に耻ぢず

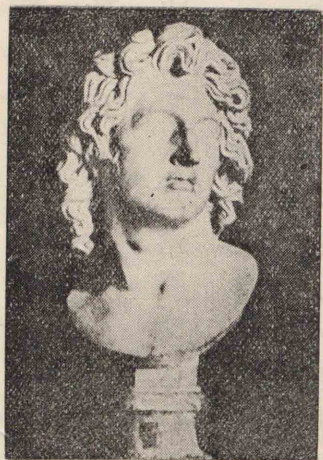
さて人の香氣は何より來るかと申候に、自敬の念より來ることを忘るべからず候。自敬とは自ら尊大に構ふるわけにてはこれなく、自己が自己に對し敬意を表することに候。この身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たるこの身も天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなばいかなる働を爲さんも知るべからず候。然るに目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは耻づかしき限りに候。君子

君子は惡木の蔭に宿らす

(1) Alexander the Great  
(西曆紀元前三五六年—三二三年)

(2) 藤原資朝の子、父が佐渡山に流入され、間山に殺され、たてに聞いて復たして三郎を殺した。

は獨行影に耻ぢず。」と申すも、君子は惡木の蔭に宿らす。」と申すも皆同じ意義にて、己を敬ふ念より出でし語に候。昔アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申出でし



王大ルドンサクレア

者ありし時、大王これを却けて、  
「朕は勝利を盗まず。」と申され候  
ひき。又日野阿新丸が父の仇を討ちし時、まづその枕を蹴て目を醒さしめて後、これを討ち候

ひき。古今戦勝の將軍、復仇の子少からざる中に、これ等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかといふに、その所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來、我はいかにし

投機

て富を作りしか。」といふ如き俗悪成功談の傳へらるゝが爲、世の青年を誤ること少からず候。小生は、青年諸君が、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷はず、たゞその才智藝能によりて、精神あり、香氣ある生活を營まんことを希望致候。香氣ある人は、世間必ずこれを認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。

以上は平凡なる語には候へども、小生の平常家兒輩に語りをるものに候へば、無難にして間違なき事だけは確信致候。小生は青年諸君が退いて右いふ香氣を養はれんことを偏に希望致候。

— 讀書樓問話 —

(一)名は猪一郎。現國民新聞社長。熊本の人。

撞着する  
しょうとつする。一致しない。

履違へる  
とりちがへる。  
權利萬能  
權利が最もえらいとするこ  
と。  
強制  
しひてさせる  
こと。  
要望  
しひてのぞむ  
こと。  
自發的  
他からいはいれず  
に自分から  
すること。

禮儀作法 (自修文)

德 富 蘇 峰

「近頃は世の中に權利思想が充滿したから、禮儀作法などに頓着する者はない。」と、或新しがりの男が語った。或はさうであるかも知れぬ。しかし果してさうであれば、それは大きな心得違だ。

元來、禮儀作法は權利思想と撞着するものではない。權利は權利だ。禮儀作法は禮儀作法だ。兩者併行各その宜しきを得べきである。「この席は自分が先占したのだから、坐る權利は自分にある。」といつて、病人のお婆さんにさへそれを譲るのを拒む者があつたら、果してどうだらう。權利思想もここまで履違へれば、寧ろ滑稽だ。子供や老人その他あらゆる弱者に對して、權利萬能を張通す人たちよ、卿等はまだ人間味を解しないのだ。

禮儀作法は他の強制や要望を俟つて始めてこれを行ふべきものでない、自ら進んで行ふべきものだ。即ち自發的に行ふべきものだ。そしてそれがわざとらしくない眞心から出れば、なほ更その馨

文化社會  
開け進んだ社  
會

(1) Diamond.

禮儀三百威儀  
三千

中庸の語。禮儀  
三百威儀三千

待其人而後  
行

自覺

圓融無礙

矯飾

恭敬

發露

外にあらはれ

る

こと

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

間

に

は

無

香が高くなるものだ。禮儀作法がすべての人相互の間に行はれて、ここに眞正な文化社會が現出するのだ。

禮儀作法は紳士を作り、淑女を作り、そして文化社會を作る。たゞ現時は、高帽の野蠻男や、ダイヤモンドの野蠻女を電車、汽車、汽船、自動車の中や、宿屋や、俱樂部や、集會の席やで往々見掛けるのは、苦々しい次第だ。世の中を殺風景にし、社會を不愉快にするのは、多くはかゝる野蠻な男女の仕業だ。古人のやうに禮儀三百威儀三千などと、それほど小面倒なことをいふのではない。禮儀作法として決してむづかしいものではない。たゞ人間並の心得さへあれば澤山だ。それには、我は何者であるかといふ自覺と、他人に對する寛恕とが必要だ。我と人との關係さへよく心得て居れば、禮儀作法は自然に出て來る。そしてこれに習熟すれば、愈々圓融無礙に出て來る。

禮儀作法は偽善でない。矯飾でない。當然のことを當然の心で行ふだけだ。いはば恭敬の心が外に發露したものだ。世の中には、無闇に威張ることを好む者がある。自ら先輩顔や、大人顔や、豪傑顔をして威張る者がある。又自ら俊秀顔や、天才顔や、腕利顔をして、眞の先輩や故老を凌轢する者もある。威張る金持があれば、その金持に向かつて威張る貧乏人もある。様々な世の中だ。しかし互に威張り合つたとして、何の利益があらうぞ。

嘗て頼山陽が日野大納言家の招宴に故に平服で赴き、そのため儕輩の物議を招いたことがある。山陽としてはそれが當人の趣味に適したのであらう。余は山陽に向かつて、蓬頭弊衣の咎めだてをするのではない。しかし一般的にいへば、他人が禮服着用の場合には、木綿の羽織なり小倉の袴なりとも着用すべきである。殊更不作法な服装をして、集會の諧調を紊亂するのは賞むべきことではない。又集會の席上では、餘りに人の目に立たぬ工夫が大切だ。萬人指目の中心となるのは、決して面白いことではない。強ひてこれを面白がるものはいはゆる廣告屋だ。

禮儀作法 (自修文)

故老

凌轢

安藝の人

本外史の著者

として

三年(二四九

二年)歿

平服

儕輩

物議

蓬頭弊衣

のや衣服のや

ぶれたもの

諧調

指目

人指さして

見ること

と目なひくこ

と

帝國新讀本卷三終

700  
- 110  
486  
21

大正十三年十一月三日印  
大正十三年十一月六日發  
大正十四年二月十二日訂正再版印刷  
大正十四年二月十四日訂正再版發行

(本讀新國帝)

價 定	
自卷一	各金四拾八錢
卷四	各金四拾參錢
卷五	各金四拾參錢
卷六	各金四拾貳錢
卷八	各金四拾貳錢
卷九	各金參拾七錢

大度	
自卷一	各金八拾二錢
卷四	各金七拾三錢
卷五	各金七拾三錢
卷六	各金七拾一錢
卷八	各金七拾一錢
卷九	各金六拾三錢



發行所

東京神田區通  
神保町九番地

合資會社 富山房

電話大手六三三七〇、七〇二三番  
振替口座東京五〇一番

編者 芳賀矢一

東京市神田區通神保町九番地

發行所兼合資會社 富山房

合資會社 富山房社長

代表者 坂本嘉治馬

東京市小石川區音羽町六丁目

印刷所 富山房印刷工場

第二學年十七學級

藤原隆城

庫  
5  
60

広島大学図書  
2000301560

